

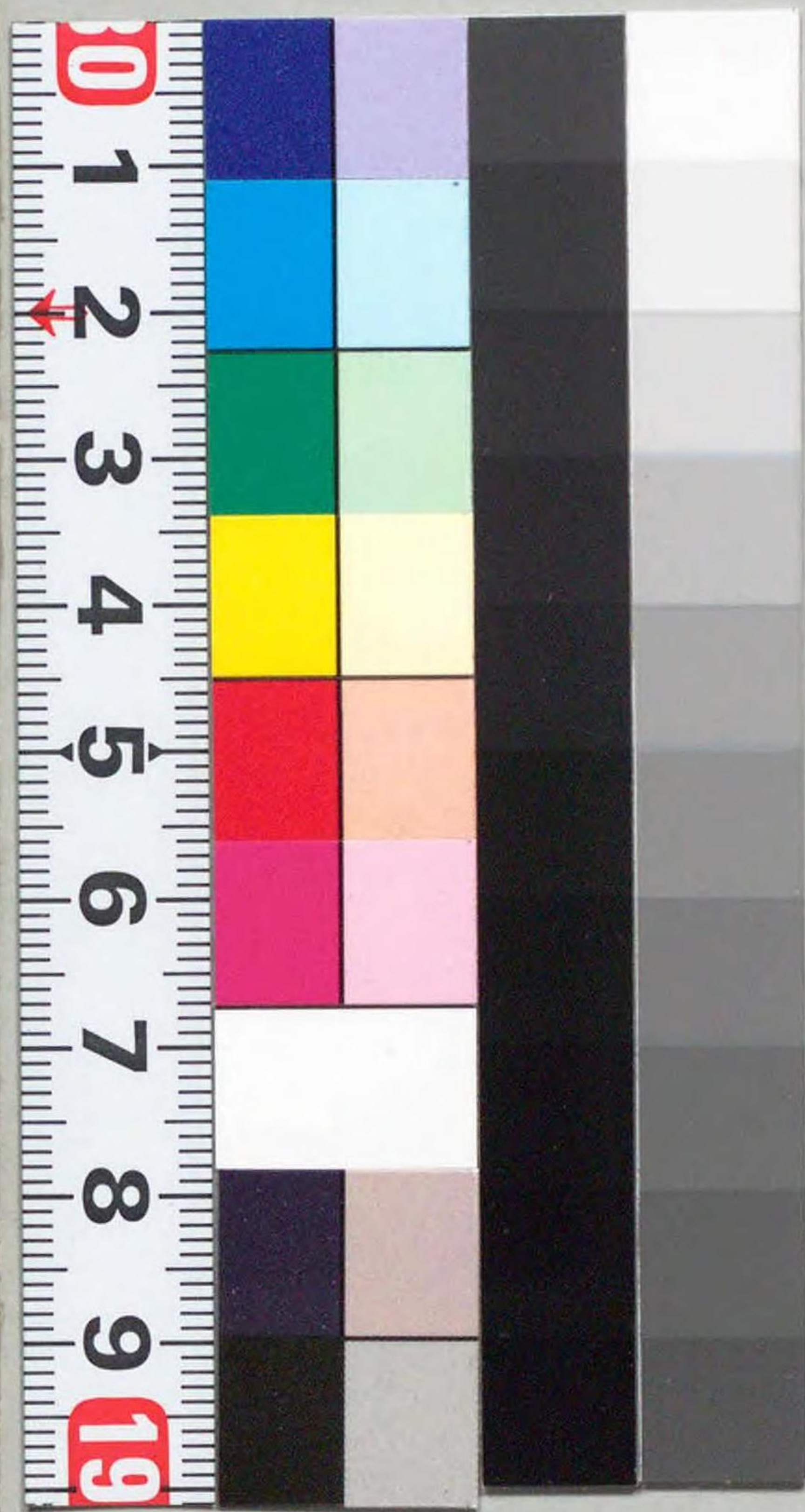


久保田万太郎

少年少女劇集

1に12をかけるのと
12に1をかけるのと

山の本書店



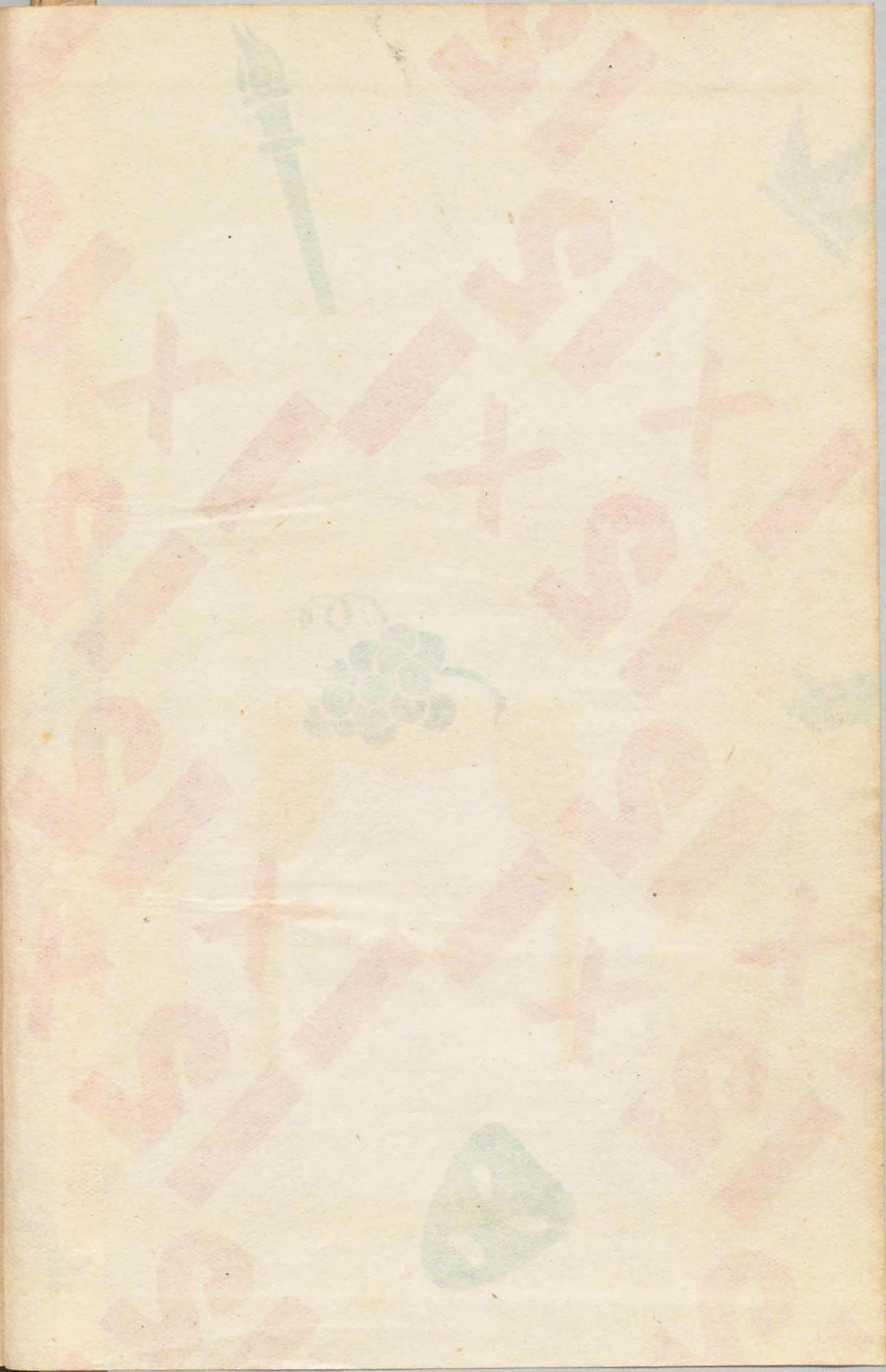


1に12をかけるのと

12に1をかけるのと

久保田万太郎少年少女劇集

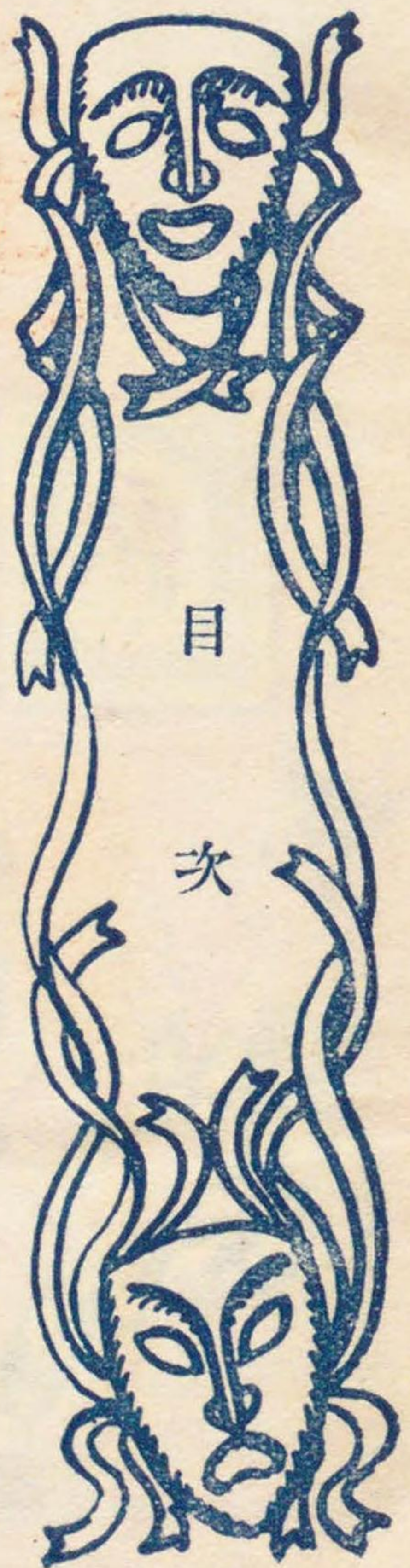
山の木書店



92
K
2



131320



目次

雨の降る日は悪いお天気……………三

一に十二をかけるのと……………四

十二に一をかけるのと……………九

こうして豆は煮えました……………九

あとがき……………一二

久保田万太郎……………一二

伊藤 燕 朔……………一七

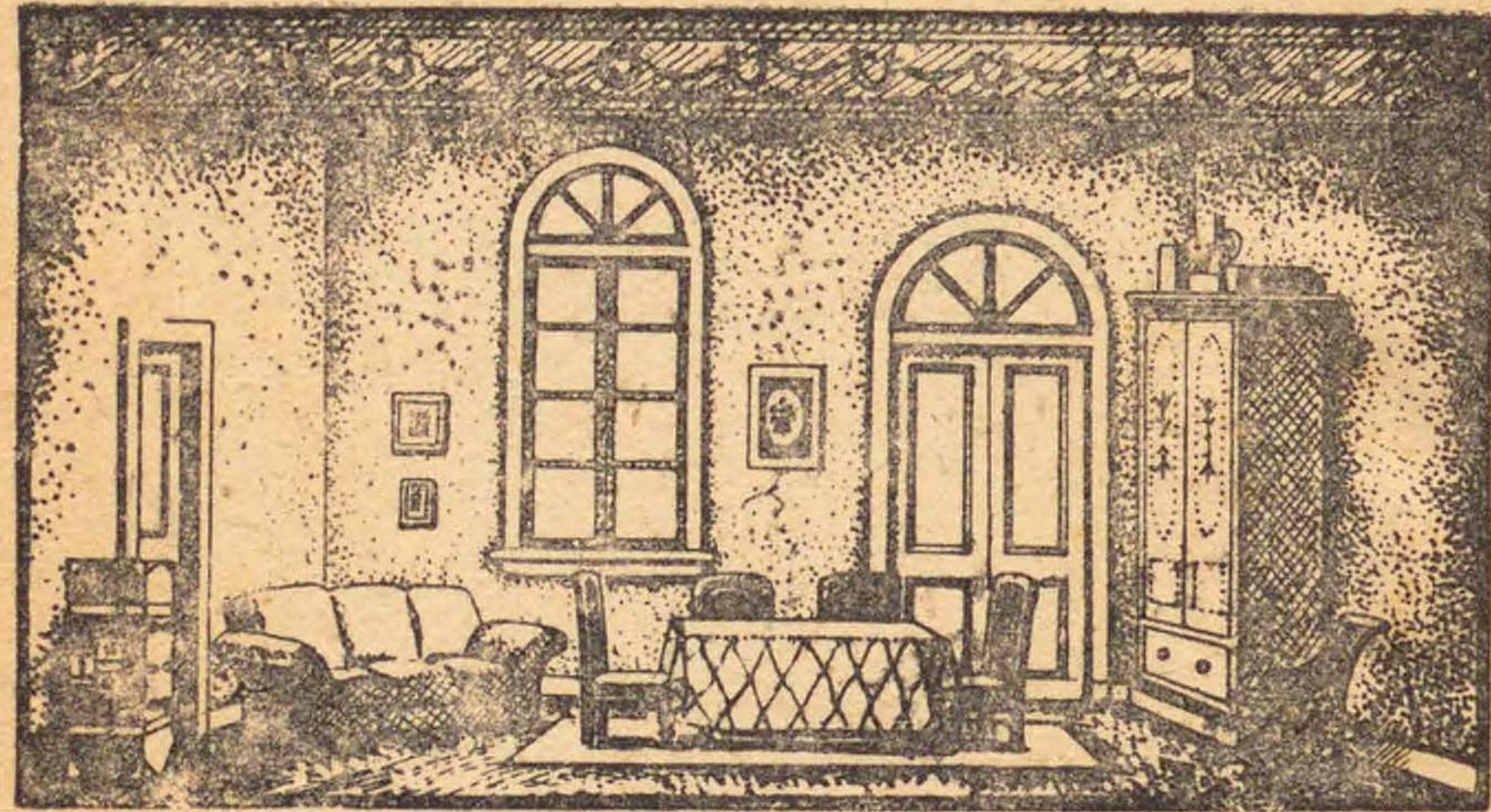
三つの劇の舞台装置に就いて……………一七

雨の降る日は
わるいお天気



雨の降る日は悪いお天気

出づる朝の露は雨の跡
あつたはち
じつじつ豆粒煮えまじり
十二のさやけむるのう
十二のさやけむるのう
雨の降る日は悪いお天気

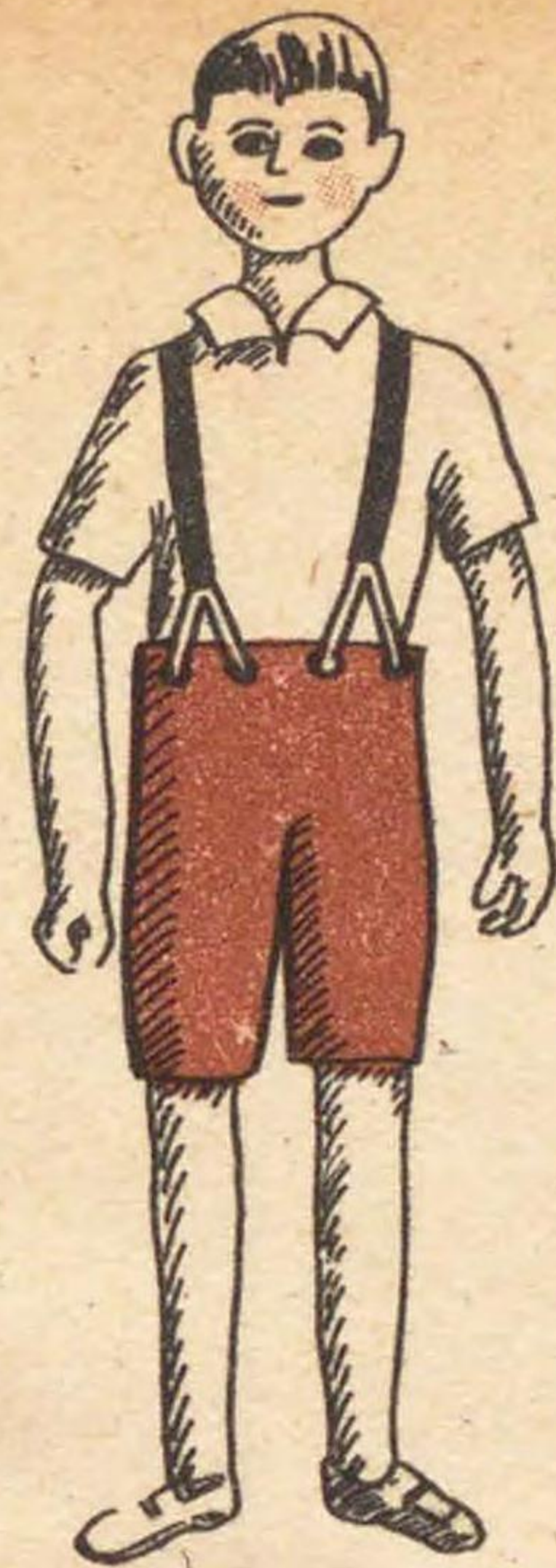


雨の降る日は悪いお天気

一郎のお父さん



一郎



太郎



春子



花子



人

一 郎

春 子 (一郎の姉さん)

太 郎 (男の人形)

花 子 (女の人形)

一郎のお父さん

幕が上ると子供部屋である。(洋式の方が都合がよい)真中にテーブルと椅子が四脚、壁には窓が一つ、戸が一ツあればいい。玩具戸棚が一ツ欲しいが、出来なければ大きな人間が二人は入れる位の箱でもいい。それから乳母車と大きなトランクか箱が要る。椅子に一郎が腰かけてテーブルに肘をついてつまらなそうな顔をして天井を眺めている。しばらくして立ち上ると窓の方へ行き外を眺め始める。

一 郎

……あアーあ、よく降るな。雨、雨止んどくれ。ちえッだんくくひどく降つ

てくらあ。いやんなつちやうな。

春子が乳母車に人形の花子に乗せて這入つて来る。

春 子

一郎さん、何してるの？

一 郎

雨の降るのを見ているのさ、

春 子

何か面白いことでもあるの？

一 郎

面白いもんか。

春 子

面白くもないのにどうして見てるの。

一 郎

うるさいな。雨が降つてつまらないから、仕方なしに雨を見てるんじゃない

か、これが雪だつたらなア。

春 子

あら、雪ならどうしていゝの？

一 郎

雪なら第一雪合戦は出来るし、雪だるまだつて作れるじゃないか。

春 子

だつて、今は雪の降る時分ぢやないの？

一 郎

そうさ、雪の降る時分ぢやないさ。今ごろ雪が降つてたまるもんか。だから、

今、雪の降る時分だつたらいゝなアと思つてるんじゃないか。

春子 ぢや、そんなどうにもならないこと、考えなけりやいゝじやないの。

一郎 何を考えたつていゝじやないか。何だ、女のくせに……。

春子 何もそんなに怒ることないじやないの。

一郎 土曜日だつて言うのに、雨が降つて、お天氣が悪くつて外で遊べないからつまらないんだよ。

春子 雨の降る日はお天氣が悪いつてことは昔つから決つているのよ。

一郎 うるさいな！ おしやべり！ 女はおしやべりだから嫌いさ。

春子 男はいたすらで亂暴だから嫌よ。

一郎 いつ、どこで、僕がどんないたすらをした？ どんな亂暴をした？

春子 いつもじやないの。戸の蔭にかくれていて人を驚かしたり、私の頭の毛をひ

つばつたりさ、亂暴よ、野蠻だわ。

一郎 うるさいよ、姉さんのおしやべり！…… そんなことより勉強するんだ、ぼくは。さ、勉強、勉強。

春子 なさいよ、勝手に。こんなに雨が降つて外には出られない日位勉強するとい

ゝわ、私はこつちでお人形と遊ぶわ。

春子、玩具棚の方へ行く。一郎、仕方なしにテーブルの上から地理の本を取り上げる。

一郎 地理を勉強するんだ、地理を。

春子、玩具棚から色々とマ、ゴトの道具を出してテーブルの方に持つて来る。その間に一郎は椅子にキチンと腰かけて地理の本を開く。

一郎 (大きな聲で読みはじめる) えへん。第五章アフリカ。アフリカは。…… (春子が相手にしないで読むのを止める) 僕、アフリカに生れなくつてよかつたな、アフリカなんて、年中暑いだけで、何にも面白いことなんかないだろうからなア。

春子 一郎さん、地理の勉強はどうしたの、地理の勉強をするんじやないの。

一郎 うるさいな、だから今しているぢやないか (読み始める) アフリカは大陸であつて、その北方にサハラの沙漠がある。…… (急にパタンと本を閉じる) 止したつと。こんなものいくら勉強したつて何にもなりやしない。アフリカの人間なら仕方ないけれど、僕は日本人なんだ。アフリカのことなんか勉強したつて何にもなりやしない。アフリカが大陸ぢやなくつたつて僕の知つたことじやないや。何も僕が

大陸を玩具に集めてやしまいし。でも、日本が沙漠だつたらいゝな。沙漠だつたら雨なんか降りやしない。こうやつて、土曜日だつて言うのに家に居なくちやならないこともないだろうしな。あアあ、沙漠にならないかな。

一郎、一人でたためを言つてゐる。この間に、春子、テーブルの上を片づけて、マ、ゴトの仕度を始める。春子が相手にしないので、一郎は立ち上つて歩き廻り乍らたためを言い続ける。春子、椅子に人形の花子をすわらせて、自分もすわり、マ、ゴトを始めようとする。

春子 ……さ、花子ちゃん、始めましょうね。

一郎 (これを見て) 何を始めるんだい、姉さん。

春子 (澄して) これから花子ちゃんと二人でお茶の会をするのよ。

一郎 なあんだ、つまらない、またマ、ゴトか。女なんてそんなことばかりしてどこが面白いんだらう。人形を相手にして一人で何かしやべつてさ、人形が返事をしないもんだから、返事迄自分でするなんて、じつにくだらないじやないか。

春子 くだらなくてもいゝのよ、私は面白いんだから。一郎さんはそつちで、太郎でも相手にして遊んだらいゝでしょう。

一郎 太郎と遊ぶ？ 人形と遊ぶなんてつまらないや。

一郎、つまらなそうに歩き廻る。春子は面白そうにマ、ゴトを始める。

一郎 つまらないな。仕方がないから太郎でも出して遊んでやろうかな。

春子 (相手にならない) ……

一郎、玩具棚から色々な玩具を引っぱり出し、下の方から男の人形、太郎を出す。

一郎 やい太郎、仕方がないからお前と遊んでやるぞ。そうだ、アフリカの土人のまねをして首切りごつこをやるう。(玩具の中から刀を取り出す。この刀は青龍刀の様に大きくて面白味があるものでなくてはいけない) さあ、太郎覺悟しろ、この刀でお前の首を切つてしまふぞ。

春子 (これを見て) あら、一郎さん、又乱暴してるのね、どうするの。

一郎 アフリカの人喰い人種の真似さ、首切りごつこだよ。

春子 でも、いくら人形でも首を切つちや可哀そうよ。

一郎 何が可哀そうなもんか、人形なんか首を切つたつて、又くつつけときやあ直つちまうんだ、女なんか黙つてろ。

春子　ぢや、勝手におしなさい。私の方はこれからお三時を食べるから。

一郎　お三時だつて？　何もないぢやないか食べるものなんか。

春子　あるのよ、これから貰いに行くのよ、さつきお母さんがあとで取りにおいでつておつしやつたのよ。

一郎　え？　そうなの。そんなら早く言えばいゝのに。

春子　だから一郎さんも、首切りごつこなんて野蛮なことやめて、みんなで一緒にお三時食べませうよ、太郎も一緒に。

一郎　（仕方なく）うん、じゃ姉さん、早く行つておいでよ、その間に僕が仕度して置いて上げるから。

春子　じゃ、頼むわよ。

春子退場、一郎いや／＼乍ら太郎を椅子に座らせ色々仕度をする。

一郎　女つてどうしてあんなに馬鹿なんだろう。そんならそうと早く言えばいゝのにさ、そうすりやとつくの昔にお三時のお菓子が食べられていたのに。それに人形まで一緒に坐らせるなんて、女の考えることなんてどうしてこんなにくだらな

いんだろう。でもまあ、仕方がないや、お菓子が食べられるんだから。大体この雨がいけないんだ。雨が降つてて外に出られないから、土曜日だつて言うのになんな風に女みたいに人形と遊ばなくつちやならないんだ。

一郎、仕度を仕終つて又窓の方へ行く。

一郎　まだ、あんなに降つてらあ、いやんなつちやうなア。あアあ、つままない、つままないゝだ。（人形の方を見て）いゝな、人形は。人形ならお天気だつて雨だつてちつともかまいやしないんだ。何んにも考えなくたつていゝし、勉強だつてしなくていいんだし。何んにも食べなくたつていゝんだからな、……こんな日にはいつそ人形の方がどれだけいゝか分りやしない。僕と姉さんが太郎と花子になればいゝんだ。ね、そうだろう。お前達も一べん位人間になつて見たいだろう？　人形達頭をコックリとする。

一郎　おや、人形が頭をコックリとしたぞ。人形も人間になりたいのかな。

一郎の體が急にギクシヤクシ始める。

一郎　おや、変だぞ、どうしたんだろう。手がうまく動かなくなつたぞ。

不思議な音楽が始まり、それにつれて一郎の體はだん／＼固くなり、遂に床に倒れてしまう。

一郎 どうしたんだろう。僕の体、どうしたんだろう、動けない。どうしても動けない。

これを見て、人形の太郎と花子が急に笑い出す。

太郎 ワツハツハツハ、こりや面白い。一郎がとうとう人形になつた。

人形の太郎と花子、立ち上つて、盤操を始める。

太郎 一、二、三、四、あア体が樂になつた。

花子 本当にね、すつかり樂になつたわ。

太郎 それにひき代えて一郎のあの恰好を見てごらん……どうだい、一郎君、人形になつた氣持は。

一郎 人形になつた？ 誰が。

太郎 君がだよ、望みがかなつて人形になれたんだから嬉しいだろう。

一郎 嘘だ、人形になんかならないよ、僕は人間だ。

太郎 ほう、人間ならそんなに床の上に倒れていないで立つて歩いたらいゝじやないか。

いか。

一郎 だから、今、立つて歩いて見せてやる。(と、動かうとするが動けない。)

太郎 どうした。動けないじやないか。

一郎 畜生、動けないなんて、うウん、どうして動けないんだろう。

太郎 だから人形になつたのさ。その代りに私とこの花子が人間になつたのさ。お前は人形になりたかつたんだろう。

一郎 嫌だ、人形になんてなりたくない。

太郎 だつて今しがた、お前はこんな日にはいつそのこと人形にでもなつた方がいゝと言つたじやないか。

一郎 あれは、あれは只そうなればいゝつて言つただけじやないか。

太郎 だからこうなつたのさ。だから大人しく人形におなり。

一郎 嫌だ、嫌だ人形になるなんて嫌だ。姉さん、姉さん、助けて。

太郎 呼んだつて来ちやくれないよ、そうだ、春子も人形になつている筈だ、こゝへつれて来なくちや。

花子 春子はあたしの人形だから、あたしが持つて来るわ。

と、花子、乳母車を押して出て行く。

一郎 (泣聲で) 困つたな、お父さん、お母アさん、助けてよ。(と、大きな聲をだす)

太郎 うるさい。そんなこと言う人形があるか。

一郎 悲しくなつて泣き出す。太郎それを見てうれしそうに笑い出す。

一郎 (やがて) ねえ、太郎、お願い。お願いだから僕を起してくれない、息がつかつて苦しくてしようがないんだもの。

太郎 息がつかつて苦しい？ おかしいね、人形が息をする筈がないがね。

一郎 ねえ、お願い、本当に苦しいんだからさ。

太郎 ぢやまあ、起してやるかな、そこに落ちていちや邪魔だからな。

太郎、一郎を起して椅子にすわらせる。花子が春子を乳母車に乗せてつれてくる。

花子 春子をつれて来たわ。

一郎 (それを見て) 姉さん、姉さん、助けて。僕、動けなくなつた、人形になつち

やつたんだ。

春子 あら、一郎さんも人形になつたの。私も動けないのよ、困つたわ、いやだわ、

私、人形になんかなるの。いやだわ。(泣き出す)

花子 まあ泣き出したよ、このお人形は。お、よし、い、子だ、い、子だ。い

い子だから泣くんじやないよ。

一郎 (春子が泣き出したのを見て自分も悲しくなり大きな聲で泣き出す) お父さん、お母さん、

僕達、人形になつちやつた、いやだ、僕、人形になんかなるのいやだ。

太郎 うるさいな、この人形は。おだまり。だまらないと戸棚の中に入れちまうぞ。

一郎 (なおも大きな聲で泣く)

太郎 仕様の無い奴だ。こんな人形、戸棚の中に入れてしまえ。

太郎、戸棚の方に行き、戸を開ける。

一郎 いやだ、いやだ、戸棚になんか入れちやいやだ。

太郎 うるさい。俺もこの暗い中には随分いたものだ。その上、頭の上に自動車だの汽車だの積木だのをのつけられたもんだ。でも俺は何んにも言わずに黙つてい

た。(一郎を戸棚に押し込む)だから、お前もこゝでおとなしくしているんだ。(あばれる一郎を押し込め、その上に色々の玩具を積み上げて戸を閉めてしまう)この位にすればこれからは少しはおとなしくなるだろう。

花子 (春子に) さ、お前もおとなしくしないとあの中一緒ににはおり込んでしましますよ。でも、お前はおとなしいから、これから頭を結つて上げようね。

春子をすわらせて髪を結び始める。太郎、これを見物している。

太郎 うん、実によく出来ている。本当に生きている様だ。

花子 何が？

太郎 いやこの眼さ。何で出来ているんだろう、ガラスかしら。瀬戸物かしら。

(と、指を出してさわつて見ようとする)

春子 (大きな聲を出す) いやッ！ (眼を閉じる)

太郎 (驚いて飛び去き) 驚いた。

花子 (びつくりして手をはなし) 何です。大きな声を出して、びつくりするじゃありませんか。人形のくせにおとなしくなさい。

春子 人形じゃないわ、人形じゃないわ、私、人形じゃないわ。

太郎 不思議だ、実に不思議な仕掛だ。この人形は大きな声を出すと眼をつぶる様に出來ている。そうだ、どんな仕掛か一寸こわして見てやろう。

花子 いけないわ、これは私の人形よ。春子は私の人形だからこわさせません。そんなに人形がこわしたかつたら自分の人形をこわしやいゝじゃないの。(と春子をかばう)

太郎 じゃ、仕方がない。よし、ちや、一郎だ、あの人形をこわして見よう。

太郎戸棚の方に行き戸を開ける。

一郎 (玩具の下から) ごめんね、ごめんね、太郎。

太郎 いゝからこつちえ出るんだ。

太郎、一郎を引っぱり出して椅子にすわらせる。

太郎 さ、こゝでおとなしく待っているんだ。(戸棚の方に戻り刀を持つて来る)

一郎 どうするんだよ。どうしようつて言うんだよさ、この僕を……ね、太郎。

太郎 さつきお前は、この刀でこの俺をどうしようとしたか覚えていただろう。そ

の通りにするんだ。

一郎 忘れた。忘れた。

太郎 何？ 忘れたと？

一郎 本当に忘れたんだよ、だから、かんにんして……

太郎 よし、忘れたのなら教えてやる。思い出させてやる。(刀をふり上げる)

一郎 あア、大変、助けて。おまわりさん来て下さい。人殺し。

太郎 人形が呼んだら、さぞかし大勢おまわりさんが来てくれるだろうよ。

一郎 (泣く) 死ぬ。僕、殺されるんだ。太郎に首を切られて死ぬんだ。

太郎 死ぬ？ 人形が死んでどうする。

一郎 だつて、首を切られれば誰だつて死ぬ。死ぬにきまつている。

太郎 たゞこわれるだけだ。こわれたらまたあとで直せばいい。

一郎 だつて、もし直らなかつたらどうする。

太郎 直らなかつたら？ 直らなかつたらそんなこわれた人形はいらないからごみ

ためへ捨てるばかりだ。

一郎 僕、直らない。僕は直らない人形だよ。

太郎 直るか直らないかはこわして見なくちや分るもんか。

一郎 (返答につまる)

太郎 さあ、いゝか、始めるぞ。

太郎 刀をふり上げる。この時、花子、突然大きな聲を出す。

花子 あ、そうだ忘れてたわ。

太郎 (びつくりして止める) え？ 何を忘れてた？ びつくりするじゃないか。

花子 そうだ、私大変なことを忘れていた。

太郎 何を。

花子 お茶の会をさ。

太郎 お茶の会？ 何んだつまらない。こつちは今忙しいんだ。

花子 じゃいゝわ。春子と二人で食べるから。

太郎 食べるつて？ 何を。

花子 お菓子。さつきのお菓子がもう出来ている頃よ、さ、私行つてとつて来よう。

太郎 そんならそうと早く言えはいいのに、俺もお茶の会に入れておくれ。

花子 でも、あなたは忙しいんでしよう。

太郎 いや、人形をこわして見るのはあとでもいゝんだ、ちや、俺がこゝを仕度して置いてやるから早くとつておいで。

花子 じゃ、持つて来るからそこを片づけて置いてね。

花子、出てゆく。太郎、仕方なしにテーブルの上を片づけ始める。やがて花子、お菓子を持つて歸つて来る。

花子 さ、持つて来たわ、ほらおいしそうでしょう。あなたも自分の人形を持つていらつしやいよ、人形達もおしよばんさせましようよ。

太郎 この一郎もかい？

花子 そうしなくちや、お茶の会にならないじやないの。

太郎 うん、人形と言うものがこう言うときに、どの位沢山食べさせて貰えるものかを思い知らせてやるのもいゝな。よし、それも面白いだろう。

太郎は一郎を、花子は春子を夫々座らせる。

太郎 さ、始めよう。

花子 おいしそうね、どれから食べましようか。

太郎 お前はどれからにする、俺はこれから食べる。(食べる)うん、これはすてきだ、とてもおいしい。

花子 (食べて)あゝ本当だ、とつてもおいしく出来てるわ。さ、お前達にも取つて上げましようね。(と一郎と、春子の前にお菓子を取つてやる)さ、お上り。

一郎と春子も生つばをのみ込んでいたが、早速手を出そうとするが動かない。色々と努力をしてみるが駄目である。この間、太郎と花子の二人はどんく飲んだり食べたりする。

一郎 (とうとう口惜しがつてどなる)いぢわる。

太郎 いぢわる？ どうして？

一郎 手が動かなくちや食べられやしないじやないか。

太郎 当り前だ。人形じやないか……

一郎 ちくしよう。ちくしよう！ (涙をポロ／＼こぼして口惜しがる)

春子 仕方がないわ。一郎さん、仕方がないわ。(なだめる)

太郎 どうしてさ？

春子

でも、あんたはお菓子のほかで助かつたんじやないの。さもなけりや今頃首を切られている頃よ。それを思つたら食べられないぐらい我慢しなくちや。

花子

いゝ子だ。お前は伸とお利口な人形だね、御褒美ごほうびに、さ、私が食べさせて上げよう、あアんとおし、あアんとお口をおあけ。(食べさせてやる)おいしいだろう。

春子

おいしいわ、私こんなにおいしいお菓子始めてだわ。

花子

おいしいだらう。

春子

ね、ちようだい。もうすこオしでいゝからちようだい。

花子

お人形つてものは、そんなあとねだりをするものぢやありません。

春子

だつて、ね、ほんのすこオしでいゝから。

花子

じやもうすこオし。これだけだよ、あとはもう上げませんよ。

春子

いゝわ。

花子

さ、あアんと口をおあけ。

花子、お菓子をまたすこし春子に食べさせてやる。一郎、これを見てたまらなくなる。

一郎

ね、花子。僕にも、僕にも食べさせて。

花子

太郎におもらいなさい。

一郎

ね、太郎、ほんの少しでいゝから、お願い、食べさせて。

太郎

食べたいか？ そんなに？……

一郎

うん、だからすこしでいゝから……

太郎

よし、じや少しだぞ、いゝか、少しだぞ。

一郎、喜んで口をあく。太郎、一郎の口の前までお菓子を持って行き、ヒョイと引つこめ自分で食べてしまふ。

一郎

……………?

太郎

どうだ。うまいだらう。

一郎

うまいもまずいもあるもんか。

太郎

うまいもまずいもない？ どうして？

一郎

食べないものわからないじやないか。

太郎

食べない？ 今ちやんと食べさせてやつたじやないか。

一郎

食べさせてなんかくれないじやないか。自分で食べちやつたじやないか。

太郎　じゃ、今度はお茶をのませてやろう。さ、いゝか。

今度はお茶をのませてやる真似をする。そして一郎が口を開けると又引込めて自分でのんでしまう。

太郎　どうだ、今度はうまいだろう。

一郎　(半分泣き聲で) ばか！

太郎　ばか？ どうしてばかだ。

一郎　ばかぢやないか、そうぢやないか、意地悪のばかぢやないか。(涙をポロ／＼こぼす)

太郎　何を言っているんだ、お前は。俺はいつもの通りのことやつているんぢやないか。お茶の会つて言えばいつもこうやるに決つていたぢやないか。

一郎　でも、それは……

太郎　いつだつてお前は俺の分迄食べてしまつたぢやないか。人形には只見せびらかすだけだつたぢやないか。

一郎　だつて……だつて僕は、人形ぢやないぢやないか。ほんとはそうぢやないぢやないか……

花子　じゃ、何なの？

一郎　ぼく、人間だ。

花子　人間？

一郎　人間の子供だ。

太郎　それはさつきまでの話だ。いくら威張つたつてもうお前は人形だ。つまりお前が俺になつて、俺がお前になつたのさ。お前がそうなればいゝつて願つた通りにな。……そのくせお前はちつとも俺の様にしんみょうにしない。グズ／＼文句を言つたり泣いたりわめいたり……そんなことではとていゝ人形にはなれないぞ。

一郎　でも、それは僕をいぢめるからぢやないか。

太郎　お前がいぢめられていると思うのなら、今迄お前も俺をいぢめていたんだ。俺は、今迄お前が俺にして來たのと同じことをして居るだけだからな。

一郎　そ、それや……(言ひわけに困る)

太郎　どうだ。そうだらう、さ、そうと決ればこんな悪い人形は始末をしまお

う。(と立ち上る)

一郎

(驚いて) どうするんだよ、どうするんだよ、僕を。

太郎

こんな出来の悪い人形は箱につめて田舎にやつてしまおうんだ。

一郎

いやだ、いやだ、僕そんなこといやだ。

太郎

いやだつてしようがない。お前みたいな出来損いの人形はそうでもするほかしようがないじゃないか。(一郎を箱の中に入れる) 花子、お前の春子も何だつたら一緒にこの中に入れてらどうだい。

春子

(驚いて) 後生だから、ね、花子、お願いだから……私いゝお人形になるから、きつといゝお人形になるから……

花子

えゝ、大丈夫だよ。(太郎に) 私の春子はどこへもやりません、いつまでも私のそばにおいてやります。……さ、お菓子も食べたから少しお家の中を散歩しよう。運動しないと毒だから。

花子、春子を乳母車に乗せて出て行く。

一郎

(箱の中から) ね、かんにんして。僕が悪かつたからかんにんしておくれ。

太郎

(それにかまわず) はてな、繩はどこにあつたつけない、確かこの辺に細引があつた筈だ。(方々さがす)

一郎

ね、太郎。お父さんが心配するから。そんな田舎になんか行つちまつたらお母さんが心配するから、かんにんして……ね、これからおとなしくするから。

太郎

お父さんが心配するつて? お前みたいな出来損いの分らずやが居なくなつたつてお父さんは心配するもんか。お父さんは人形のことなんかにかまつている暇はないよ、……はてな、どこへ行つたらう。(さがし続ける)

一郎

うそだ。僕は人形じゃない。

太郎

まだそんなことを言っている。

一郎

僕は人間だ。だれが何と言つたつて人間の子供だ。

太郎

ちや、何故人形になりたいなんて言つたんだ。

一郎

そんなこと言やしない。

太郎

いや、言つた。確かに、こんな日にはいつそ人形にでもなつた方がいいと言つたぞ。

一郎 …………… (黙る)

太郎 人形になれば何も考えなくつてもいゝし何も食べなくつてもいゝ。こゝも言つた。…………… そうだ、それから、僕と姉さんが太郎と花子になればいゝ…………… こゝも言つた。それを忘れたのか、お前は。

一郎 ……………

太郎 だからお前の言つた通りになつたんだ。神様がそうして下さつたんだ。

一郎 ……………

太郎 そうだ、いゝことを教えてやろう。この間、お前が居ない時、お前のお父さんがこゝへ来て一人言を言つているのを聞いたけど、あんなに手のかゝる子供はいない。いつそのこと居なければどんなに氣が休まるかしれないつて言つてたぞ。

一郎 ……………

太郎 どうした。すつかりだまつてしまつたじやないか。どうして急にそしておとなしくなつてしまつたんだ。おい。

一郎 ……………

太郎 じや少し外に出してやろうか。(一郎を外に出す) どうした。何て顔をしているんだ。さつきの元氣はどうした。

すつかり元氣をなくして、ぐつたりしてゐる一郎を見ながら面白そうに椅子にまたがる。

太郎 しつかりしろ、もつとしつかりしなくちやだめだぞ。

一郎 ……………

太郎 田舎へ行つてお前は田舎の子供の相手をするんだ。ヒョットすると田舎の子供はお前を野原の真中においてきぼりにするかもしれないぞ。それでもお前は知らん顔していなくちやいけない。お前は人形なんだから、人形には神経がないんだからな。(歩き廻る) 雨が降つても、日が照つても、そんなことは人形に關係はないんだ。ただ、だまつておとなしくジツトしていればいいんだ。お前にそれが出来るかな。

この時、ドアをノックする音が聞える。太郎、立ち止つて耳を傾ける。
又ノックの音。

太郎 おはいり。

一郎のお父さんがはいつて来る。

お父さん　おい一郎。

太郎　(前が出る)はい、こゝに居ます。

お父さん　おや？　君は？

太郎　一郎です。

お父さん　一郎だつて？　君が？

太郎　そうです。今日から私が一郎になつたんです。

一郎　(叫ぶ)お父さん！　お父さん！　僕こゝに居ます。こゝに居るのが一郎です。

お父さん　一体、これは、どうしたと言うんだ。

太郎　さつき、僕がこんな日にはいつそのこと人形にでもなつた方がいゝと言つた

んです。そうしたら僕が人形になつて、太郎が僕になつちやつたんです。

お父さん　そうか、それなら太郎の一郎、一寸言うことがあるから俺の部屋へおい

で。(と、むずかしい顔をする)

太郎　どうしてです？

お父さん　今しがた学校の先生が俺の所へワザ／＼見えた。お前はちつとも勉強を

せんのだな。どうしてお前はそう世話ばかりやかすんだ？

太郎　知りませんよ、僕は、……そんなこと僕知りませんよ。

お父さん　知らないぢやすまさないぞ、知らないと言つたんぢや今日はすまさない

ぞ。……ちやんと返事をしなさい。どうしてそんなに勉強しないのか、どう言う

つもりでそんなに怠けてばかりいるのか返事をしなさい。はつきり。

太郎　でも、……僕は何にも……

お父さん　さ、返事はどうした。

太郎　でも……おい、一郎、一郎……(うろろろする)

一郎　知らないよ、僕は知らないよ。僕は人形だから何にも知らないよ。

太郎　言つたな、こいつ！

お父さん　さ、返事が出来ないのならこつちへ來なさい。仕置をしてやるからこつ

ちへ來なさい。

一郎　そればかりぢやないんです。もつと悪いんです、その太郎は。刀で僕の首を

斬ろうとしたんです。

お父さん 刀で首を？

何故そんな乱暴なことをするんだ。

一郎

まだあるんです。お菓子を見せびらかしただけで皆一人で食べちやつたんです。僕の分迄食べちやつたんです。

お父さん

何故そんな意地の悪いことをするんだ。

一郎

まだあるんです。僕をその箱の中につめて田舎へやつちやうつて言うんです。お父さん

田舎へ？

いよくけしからん。もうかんべん出来ない。さ、こつちへ来るんだ。来なさいと言つたら来なさい。

太郎を無理矢理に引つ張つて出てゆく。

一郎

(あとを見送つて) アツ、ハツ、ハツハ、アツハツ、ハツハ。……………。

一郎、笑い過ぎて後へひつくり返る。

花子が春子を乳母車にのせて出てくる。

花子

ね、せい／＼したでしょう。やつぱり何か食べたあとは少し運動しなくちゃ毒ね、ことにこんな雨の日は外へ出ないから少し位運動しないとイケないわ。

春子

……………。

花子

どうしたの。いやに元気がなくなつちやつたのね、お腹でも痛いの。

春子

いゝえ、……………けど。

花子

けど？

春子

心配だわ、あたし……………

花子

心配？・何が？

春子

だつて一郎が田舎へやられちやうんですもの。

花子

大丈夫よ、やられやしないわよ。

春子

だつて太郎がそう……………

春子

たゞそう言つただけよ、たゞそう言つておどかしたただけだよ。

この時、太郎、あわてゝ逃げるようにはいつて来る。——ドアを押えて、ホツとする。

花子

まア、どうしたの、そんなにあわてゝ？

太郎

どうしたも。こうしたもありやしない。ひどい目にあつた。

花子

ひどい目に？

太郎 一郎の代りにいやと言う程仕置をされた。

花子 まア、おしおきを？

太郎 むちでビシヤ／＼三十五ぶたれた。

花子 まア、三十五も？

太郎 あとまだ十五ぶたれる所をようようの思いで逃げて来た。あの上ぶたれたらきつとあすこで目を廻しちまつた……

花子 ……………

太郎 もうこり／＼だ。

花子 何が？

太郎 一郎の代りになるのは、だ。あんな目にあう位なら、もとの人形でいた方がよつぽどい。

花子 だ、だめぢやありませんか、そんなことを言つちやア……そんなことを言つたら、あたし達すぐにまたもとの……

太郎 いや、その方がい。やつぱり俺達は人形にかえつた方がい。

花子 そんな、ばかな、……

太郎 いゝや、お前はまだぶたれないからだ、むちでぶたれて見ればよく分る。とても俺達は人間ではいられない。

花子 私は何にも悪いことをしないから、ぶたれるなんてことはありません。

太郎 そんなこと言つていても今にぶたれる。きつとそんな目にあうに決つていゝ。……だから今のうちに早くもとの人形にかえつてしまつた方がい。

花子 いやです。私はいやです。

太郎 いやだと言つてももう遅い。もう俺が神様をお願いしてしまつた。

花子 まア何と言うことを……

太郎 さ、お前も早くお願いしろ、早くしないと又お父さんが来たら大変だ。……どうか神様、早く私達をもとの人形におかえし下さいませ。

音楽。……太郎と花子、だん／＼と體がシャツテヨコ張つて来る。そしてとうとう床に倒れて人形に戻つてしまふ。音楽變る。今度は一郎と春子が音楽につれてむく／＼と起き上る。そして、しまいに又もとの様に人間になる。

音楽止む。

一郎 あゝ、僕は、僕は……

春子 あら、私も、私も……

一郎 もう人形ぢやないんだ、もう人形ぢやないんだ。

春子 人間になつたんだわ、人間にかえつたんだわ……

二人、喜んで踊り廻る。

一郎 (倒れている太郎に気がつき) やい。太郎め、よくも僕をいちめたな。人形だと思つてよくも僕を馬鹿にしたな。

太郎 (黙つて倒れている)

一郎 さあ、仇をとつてやる。覺悟しろ。(と、刀を拾つて一人でえぼる) さ、春子姉さんも仇をおとりよ。

春子 いやよ、あたしは。

一郎 どうして?

春子 花子はあたしを大事にしてくれたんですもの。

一郎 じゃ、いゝよ、僕は一人でやる。

春子 えゝ、勝手におやりなさい。ねえ、そうだね。(と、花子の頭をなでる)

一郎 じゃ、いゝよ。さ、いゝか、覺悟しろ、今度は本當に首をチョン切つちやうぞ。

一郎は刀をふり上げて一人でえぼる。この時、ドアが開いてお父さんがはいつて来る。

お父さん ころら、一郎!

一郎 (思はずその方をふり向く)

お父さん 何だ、そのまねは。

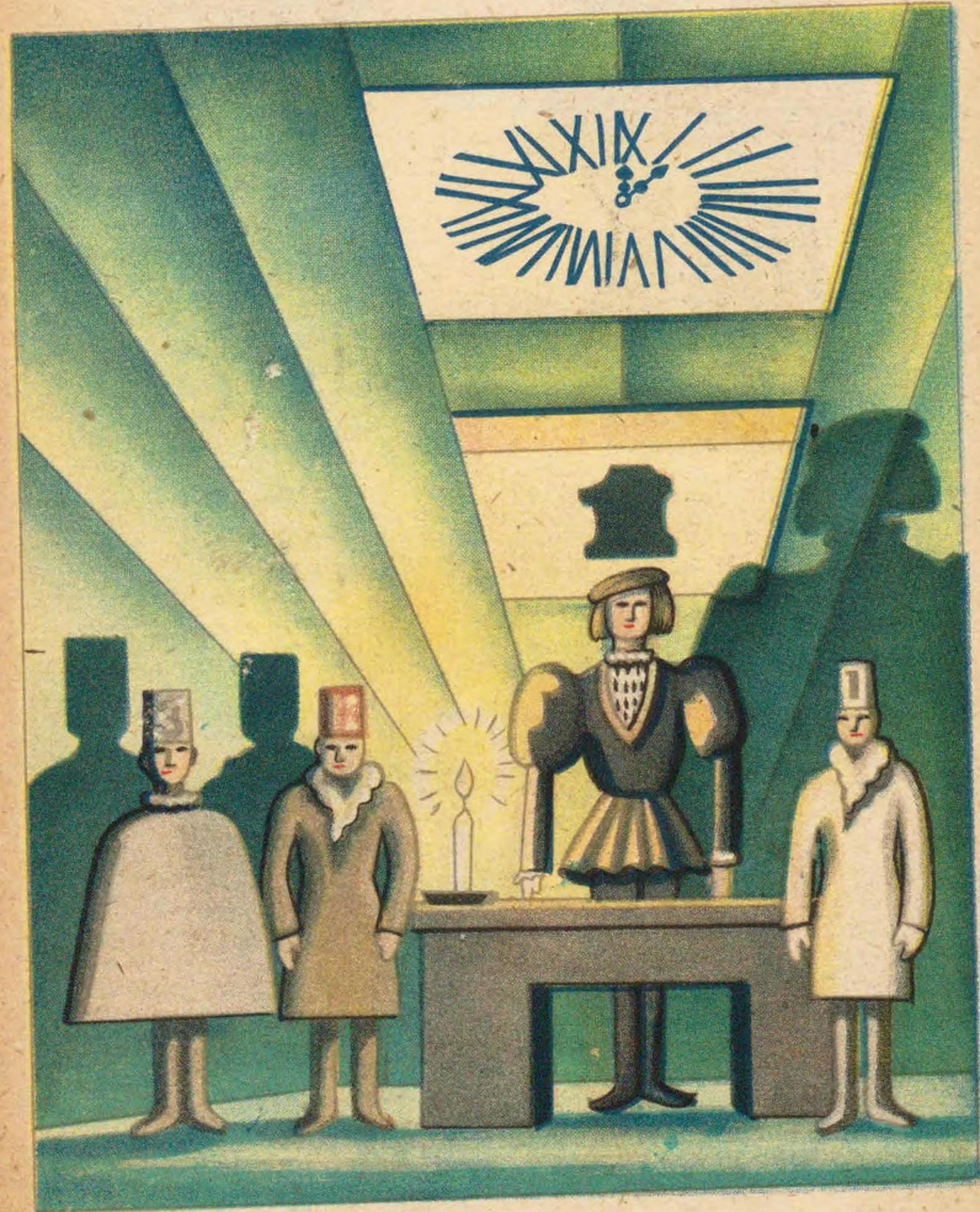
一郎 だつて、太郎が僕を……

お父さん もういゝ。太郎は俺がさつきもう仕置をしておいた。

一郎 でも……

お父さん お前の代りに太郎のおしりを三十五ぶつた。太郎はお前の代りにお仕置をうけたんだからもうゆるしてやりなさい。太郎も悪いがお前も悪い。お前がふだん太郎をいちめさえしなければ太郎だつてお前をいちめやしなかつたんだ。そのしようこには春子をごらん。ふだんから春子は花子を大事にかわいがつていた

一に十二をかけるのと
十二に一をかけるのと



から、花子も春子を大事にしたんだ。

お父さん いゝか、これにこりてもう乱暴なことをしちやいけないよ。たとえ人形でも大事にしてやらなくてはいけない。いゝね、分つたね。

一郎 はい、分りました。

音楽が始まる。それにつれてだんだん暗くなる。

音楽が變ると又だんく明るくなる。

一郎が椅子にまたがつて一人であたたかた寝をしている、太郎と花子が机に向つてすわつている。すべてさつき春子がお菓子をとりに出て行つたときのまゝである。

間

戸を開けて春子が首を出す。

春子 一郎さん！ 一郎さん！

一郎 (驚いて目をさます)

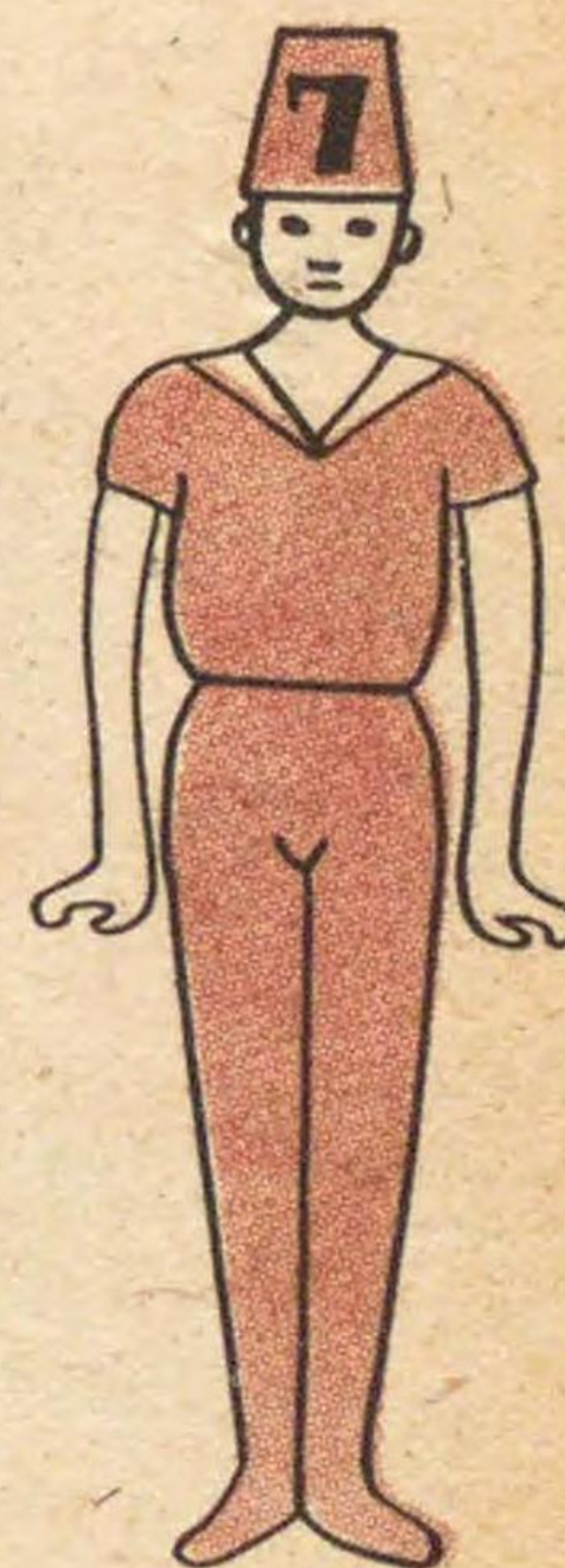
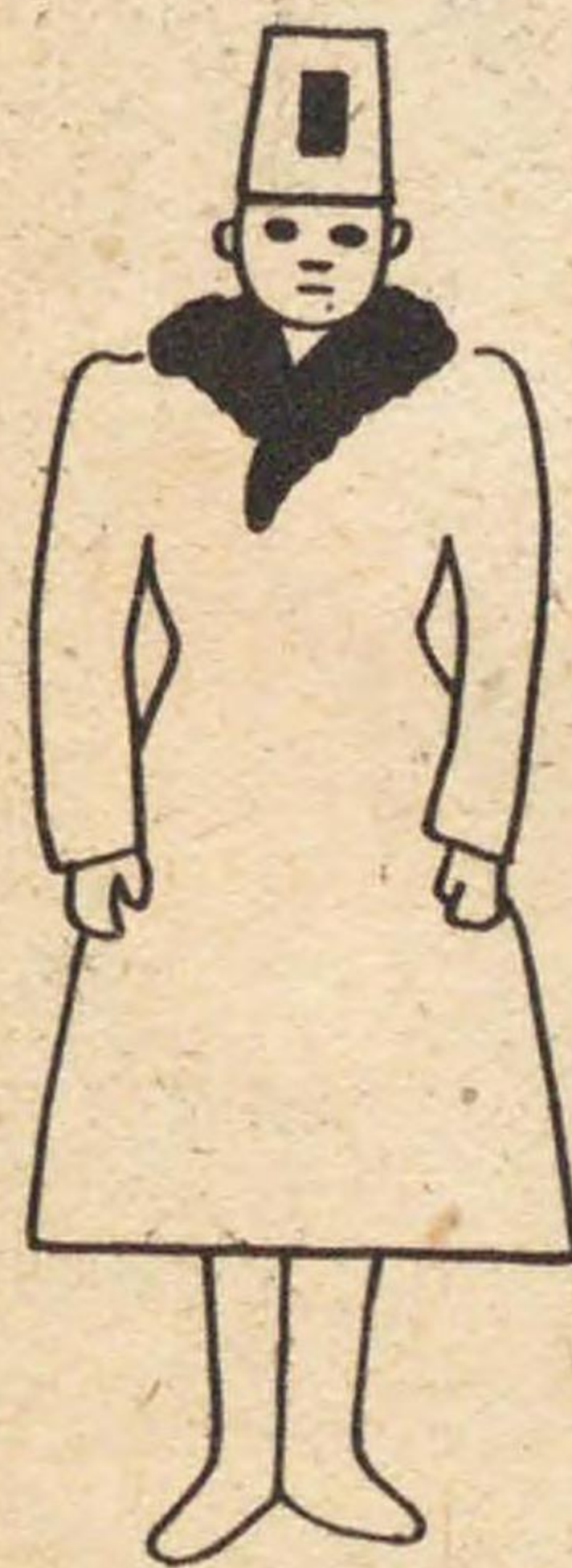
春子 なあんだ、一郎さん眠つてたの。あつちにお三時の仕度が出来たからいらつしやいつて。

古い年 (去年)

新しい年 (今年)



1月	白色	3月	紫色	4月	桃色	7月	青色
2月	灰色	10月	枯葉色	5月	黄緑色	8月	橙色
12月	茶色	11月	薄茶色	6月	緑色	9月	空色



一郎

(ねぼけて) え? お三時?

春子

こゝで太郎と花子と四人でお茶の会をしようと思つてたけど、お母さんがあつちで一緒にいたゞきましようつて?

一郎

お父さんは?

春子

まだお帰りにならないわ。

一郎

僕の学校の先生、みえなかつた?

春子

え? 先生? あんた何言つているの、ねぼけちやだめよ。

一郎

あゝ、よかつた。

春子

目をさまして早くいらつしやい、待つているわよ。

春子、ばた／＼と馳け去る。

一郎まだ信じられない様な顔であたりを見廻す。太郎と花子の顔をおそるおそる覗き込む。そしてソツと頬つぺたをつ／＼ついて見たりする。

やがて安心した様に両手を高々と上げてあくびをする。

一郎

あアあツ、やつぱりか。でも夢でよかつた。さ、行こう、お三時、お三時、



一に十二をかけるのと
十二に一をかけるのと

タラ、タラ、タラ、タラ……

一郎、鼻唄を歌い、スキップし乍らドアを出て行ってしまふ。
机に向つて太郎と花子、向い合つてジツと動かないですわつてゐる。

幕

登場人物

（古い年）
（新しい年）

去 年 今 年 一 月 二 月 三 月 四 月 五 月 六 月 七 月 八 月

九 月 十 月 十 一 月 十 二 月
隆 一 （男の子）
良 子 （隆一の妹）
健 次 （友達）
雪 江 （//）
おばあさん （同隆一と良子のおばあさん）

このお芝居は昔のことでも今のことでもありません。このお芝居を見る人が昔と思えば昔、今と思えば今です。

第一場 『年』の部屋
第二場 隆一君の部屋
第三場 またもとの『年』の部屋

第一場 『年の部屋』

幕あがると『年の部屋』の部屋、正面に大きな事務机といすがある、机の上には色々な書類が散亂して、そのすみに卓上電話機が載っている。下手に戸口があり、正面奥の壁に窓があり、時計と大きなはがし暦が掛っている。上手に暖爐がある。

一人の老人(古い年去年)が書類を整理して、不用のものを暖爐で燃している。時計は十二時五分前を指している。はがし暦に十二月卅一日という文字がはつきり讀める。しばらくすると電話のベルが鳴る。

古い年

(電話に出る)もしく……もしく……いゝえ、違います、私は古い年で

す……えゝ『新しい年』はまだ來ません。(時計を見て)そうですね……あと五分ばかりで交代の時間ですから、間もなくもう來るでしょう……えゝ、ありがとうございます、全く疲れしました、でもどうやらこの一年間大した事件もなく済んだんでホッとしている所です……えゝ、ありがとうございます、もう御目にかゝることもあるまいと思ひます。でわごきげんよう、さようなら……(電話を切る)やれく、もう五分ばかりだ、さ、急がなくちや。

『古い年』又片づけものを續ける。

——間——

やがて遠くから馬ぞりの鈴の音が聞えて來る。『古い年』それに氣付いて耳を傾ける。そりの鈴の音だん／＼近くなる。そして戸口の前で止る氣配がして誰か戸口をたたく。

古い年

……はいく、どなたです？ どうぞおはいり下さい。

戸を開けて新しい年今年がはいつて來る。若々しい元氣な青年で、明朗、快活な動作、スリッパを持っている。

新しい年

ごめん下さい、僕『新しい年』です。どうも遅くなりました。……

古い年

やあ『新しい年』さんですか、さつきからも見える時分だと思つてお待ち

していました。寒かつたでしょう、さ、さ、ずつと暖爐のそばにおより下さい。

新しい年

えゝ、ありがとうございます。(火にあたりながら)あゝ寒かつた。どうも遅くなりま

した。お待ち遠さまでした。

古い年

いやく、まだ交代の時間には五分ばかりあるでしょう。さ、火の側で休

んでいて下さい。

新しい年 え、ありがとうございます。(そこいら中を珍らしそうに歩き廻る、時計の所へ来て) ああ、もうすぐですね、僕の仕事が始まるのは(古い年が未だ忙しそうにしているのを見て) 『古い年』さん、もうお休みになつたらい、でしよう、後は僕がやりますよ。僕はこんなに元気ですから、どんなことでもどん／＼やるつもりです。

古い年 (なおも仕事を続けながら) いや／＼貴方にお渡し／＼なくてはならない書類の始末がまだ出来ていないので……今年はいそがしい年でした。もつとしたいことが沢山あつたのですが、思っていた半分も出来ませんでした。そしてこうしているんなことをし残したまゝ去つて行かなくてはならないのが心残りです。

新しい年 そのあなたがし残したことつて言うのはどんなことですか？ 聞かせて下さい。僕に出来ることだつたら、僕が代つてやつて見ます。……こゝへ来る途中、そりの上で僕は色んなことを考えて来ました。僕は僕が面倒を見る一年間を今迄になかつた位幸福な一年にして行くつもりなんです。

古い年 あなたはまだお若い。そして元気があつて色々としたいことを頭の中にいっぱい持つておいでのようだ。しつかりやつて下さい。……私も一年前にこゝへ来

た時は丁度貴方のように若くて元気があつた、そして貴方と同じようにやつぱりやつて見たいことを山程考えていました。でもやつぱり思つていた半分も出来なかつたのです。そしてこう年をとつてしまいました、貴方はしつかりとやつて下さい。

新しい年 え、やりますとも。

古い年 (机の上の大きな帳面を取り) ここに私がして見たいと思つてどうとう出来ずにしまつたことが全部書いてあります、お暇の時にでも読んで見て下さい。何かのお役に立つかもしれませんから。

新しい年 え、読みます。そして僕に出来ることならどん／＼やつて見ます。

古い年 ありがとうございます。

新しい年 けれども僕は出来るだけ僕の思うような年にするつもりです。一生懸命にやつて世の中の人間達を幸福にしてやるつもりです。僕は子供が大好きです。だから子供達が喜ぶように、子供達がこんなに面白い年は今迄になかつたと言う様な年にしてやります。

色々な思いつきが次から次からと出てくる様子で、手をふり上げたり下ろしたりしながら歩き廻る。

新しい年 (立止つて) ねえ『古い年』さん、一生懸命やりさえすれば出来ますねえ。ぼくは子供達の喜ぶ顔を見るのが一番好きです。

古い年 え、しつかりおやりなさい。私も貴方と丁度同じような考えを持つてました、一年前にこゝへ来たての頃はね、でも、いざとなると、思いもかけない所から邪魔がはいつて、思うようには仲々行きませんでした。例えば第一あのお天気と言ふ氣まぐれ者がいます。それと人間達だつて随分勝手なことばかり言います。

新しい年 お天気とか言う者はそんなに氣まぐれ者なんですか。

古い年 いまにお分りになります。次がああ『月』たちです。全部で十二人居ますがこれを又次々と順序よくならべて行くのがなみたいこのことではありません。何しろ十二人が十二人ともそれ〴〵違つた性質なんですからね、中でも六月なんて言うのはメソソ泣いてばかり居る泣き虫で、意氣地がないのでお天気までジメ〴〵して雨ばかり降りたがります、そう〴〵三月つてやつも始末にいけない子です。氣が多くて一寸の間もじつとしていない奴ですから、お天気だつてそれ

をいゝことにして寒かつたり、暖か〴〵つたり、人間達が悪い風邪をひくのは大抵この月です。でもまあ私はどうにかこうにか十二人の連中をけんかしないように列べてやつたつもりです。もうじきに今働いている十二月がこゝへ歸つて來るでしょう。

新しい年 え、その十二人の『月』たちのことは來る前にも話に聞いていました。

でも僕はその連中とよく話し合つてうまくやつて行きましよう。

古い年 それからいつも世の中をまわつて歩いて氣をつけてやつて下さいよ、少しでも油断をしていると田畠の作物が枯れたりします。そうかと言つて雨ばかり降ると洪水がおこりますしね。とにかく私はこの一年間働きづめに働いたのですっかり疲れてしまいましたよ。

新しい年 そうでしょう、大変でしたでしょうね。

古い年 そう〴〵貴方は子供達のことをおつしやつてましたね、この子供達と言ふものが又厄介なもので、日のポカ〴〵あたるいゝお天気の日を作つてピクニックや草摘みをさせてやつてもすぐに倦きてしまつて、秋のとんぼつりの方がいゝな

んて言い出すし、夏にしてやれば、海水浴をしてよるこんで遊んでいるかと思うと、すぐそれにあきて、雪合戦がしたいなんて言い出します。怠け者の子供などは一年中夏休みだつたらいゝのにとこゝへ電話をかけてくる始末です。……でも、私は、私に出来ることだけは一生懸命してやつたつもりです。

時計が十二時を打つ。

古い年 (がっかりしたように) いけない、とうとう時間になつてしまいました。さあもう、あなたの年になつてしまいました。私は行かなくてはなりません。

遠く下界の方から『ほたるの光』が聞えて来る、『古い年』それをぼんやりと聞いている。

古い年 ……私の年はおしまいになつてしまつた……思つたことの半分も出来なかつたのに……(窓から見下す)

新しい年 いや、貴方は立派にお仕事をなさつたに違いありません。ほらお聞きなさい。それが何よりのしようこには人間達があゝやつて貴方がなさつたこの一年間のお仕事にお別れする歌を歌つていきますよ。

古い年 (はるか下界の方に窓から手を振りながら) さようなら、子供達、しあわせにおなり

……さ、もう行かなくてはなりません。『新しい年』さん、どうも時間がなくてこの部屋も散らかりつばなしで……書類は貴方のいるものだけは机の抽出しに入れてあります。皆一目で分るようになってあるつもりです。

新しい年 どうも、お世話様です。……さ、いよく僕の年が始つた。夜があげたらすぐに仕事を始めなくちや。

だれか戸口をたたく音。

新しい年 おや、だれか来ましたよ。

古い年 あゝ、十二月君でしょう、おはいり。

戸口をあけて、十二月、はいつて来る。——白い上着に白いズボン、全身白いものを着て胸に大きく12と書いてある。

十二月 ごめん下さい。(『古い年』に) たゞ今帰りました。

古い年 あゝ、十二月君、疲れたろう。ほんとうに御苦労だつた、何も変つたことはなかつたね。

十二月 はい、さつきまで『明日は楽しいお正月だ』と言つて、歌ばかり歌つて仲

々寝ない子供が大分居まして親達を困らせていましたが、私が眠りの砂をまいて歩いたので、今頃全部眠つたはずでございます。

古い年 そりや御苦勞だつたね。こゝに居られるのが今年一年君達の面倒を見て下さる『新しい年』さんだ。『新しい年』さん、これが十二人の月達の中の十二月君です。あなたのお仕事を一ト月だけお手傳いする人です。

新しい年 やあ、君が十二月君ですか。ぼくは『新しい年』です。どうかよろしく願いますよ。(と、握手する)

十二月 はあ、こちらこそ……

古い年 さ、十二月君、疲れたろうから、あつちの部屋へ行つて休み給え。

十二月 では、そうさせて頂きます。(『新しい年』)では、又、いづれお手傳いさせて頂きます。(『古い年』)どうも色々と御世話様でございました。どうぞ御元氣で。

古い年 有難う、君も元氣でね、じや、ごきげんよう。

十二月出て行く。

古い年 さ、『新しい年』さん、私の仕事はこれですつかり終りました。では後はよろしく御願いたします。

新しい年 え、万事引受けましたから御安心下さい。御疲れ様でした。

古い年 (がいとうを着ながら)ほんとうにすつかりくたびれてしまいましたよ。(壁の曆に氣が付き)あ、あすこにまだ私の曆がかゝつていた。

新しい年 あ、それは私があとで取りますから……

古い年 いや、これは私が記念に持つて行きますよう。

『古い年』曆をはづして腕にかゝえ、仕度をし終つて戸口の方へ行く。

『新しい年』送つて行く。

古い年 (あたりを名残惜しそにながめ)では、さようなら、しつかりおやりなさい。いゝですか、くれぐれも『月』達のならば方に御氣をつけなさいよ。

新しい年 (少しうるさそうに)え、御忠告ありがとうございます、何とかやつて見るつもりです。

大丈夫です。……御氣をつけになつて。

古い年 子供達を可愛がつてやつて下さいよ。じや、ごきげんよう。

新しい年 さようなら、ごきげんよう。

『古い年』戸口より出て行く。やがて又馬ぞりの鈴の音が聞えて、それがだん／＼遠くなつて行く。『新しい年』しばらく窓から手を振つて見送る。やがて机の前に座りスリッパより自分の暦を出してながめる。

新しい年 ……『古い年』の最後に言つた言葉を思い出して、子供達を可愛がつてやつて下さいよ……か。ぼくはあの老人よりも誰よりも子供が好きなんだ。子供達の思う通りのことをしてやつて思う存分に喜ばしてやろう。そうだ、今年は万事子供本位にしてやろう……さて、さしあたりぼくの仕事を手傳つてくれる『月』を決めなくちやならないけれど……どれにしたものかな。

暦をくり始める。

間

電話のベルがなる。

新しい年

（電話に出る相手方の聲がフキルターマイクを通じてスピーカーより聞える。可愛らしい男の子の聲である）はいはい（アノモシ／＼『新しい年』ノオジサンデスカ？）ええ、そうです、ぼくが『新しい年』です（新年オメデトウゴザイマス）いやおめでとう。

（ボク日本ノ子供デス。今カラ今年デシヨウ？ ダカライ、子ニナルオ約束ヲシマス）いゝ子になるお決束だつて？（エ、今年カラハ僕一ツオ兄サンニナツタダカラ、ナンデモ自分ノコトハ自分デシマス、ソレカラオイタモシマセン、オモチヤヲコワシタリゴホンヲヤブイタリシマセン）うん／＼えらい／＼、一ツ兄さんになつたらえらくなつたね。（ダカラ、オジサン、ボクモイイ子ニナリマスカラ、今年ハ嵐ヤ大水ナンカナイイ、年ニシテ下サイネ）ええ、いゝともいゝとも君達子供がいゝ子になりさえすればおじさんも一生懸命精一ぱいの仕事をしていゝ年にするつもりですよ。（モシ／＼、ソレカラモウ一ツオネガイガアルンデスケレド）何だね、お願つて言うのは（アノネ、今年ノ日曜日ハ皆イ、オ天気ニシテ下サイネ、イツノ日曜日デモ外デ遊ベルヨウニネ）はッはッはッは、日曜日には必ず外で遊べるようにとね、はッはッは、いゝともいいとも、きつとそうしますよ（デワ、オ願イシマス、サヨウナラ）あゝさようなら……（電話を切る）

『新しい年』立ち上つて歩きまわる。

新しい年

……『いゝ子になるから日曜日はいつもお天気にしてくれ』か……子供

つて可愛いゝもんだな。あゝ言う可愛いゝ子供達を皆喜ばしてやりたいもんだ。皆一人々々の願いを聞いてやりたいもんだな。……だが待てよ。一人の子供が冬がいゝ、雪合戦や雪だるまを作る方がいゝと言うのに、もう一人の子供が夏の方がいゝ、海で泳いだり、山登りがしたいと言つたらどうしよう。……こつちの女の子が春の野原で花摘みをしたいと言うのに、あつちの女の子が秋の山でくり拾いをしたいと言ひ出したらどうしよう……(考えながら歩きまわる)……さうだ、春と夏と秋と冬が別々にあるからいけないんだ、うんそれがいゝ、皆一緒にするんだ、春と夏と秋と冬を一遍に働かせればいゝんだ。一年十二ヶ月の『月』たちを十二人皆一ぺんに働かせればいゝ。……なに一人づゝ一ト月交代で働いたつて、十二人が一ぺんに十二ヶ月働いたつて、結局同じことじやないか。12に1をかけたつて、1に12をかけたつて答えは同じぢやないか……そうすれば今迄の年とまるでちがつた年になるわけだ。……さうだ、そうすれば本当の意味での新しい年になるわけだ。さうだ、さうしよう。

『新しい年』浮き浮きとして机の前に座り曆を取り上げる、すると戸口でだれかノックする音が聞える。

新しい年 ……おや、だれだろう？ おはいりなさい。

戸を開けて『二月』がはいつて来る。

一月 おめでとうございます。

新しい年 おめでとう。……君は？

一月 『一月』でございます。

新しい年 あゝ、君が『一月』君か。さ、こつちへはいつて火に當り給え。

一月 は、有難うございます。私は今まであなたがお呼びになるのを待つて居りましたけれど、あまり遅いものでこちらからお伺うかがいました。

新しい年 あゝ、そりや失敬したね、何一寸考えごとをしていたもんでね。……ね、君、僕はこの一年間に色々なことをして人間達を幸福にしてやりたいと思つてい

るだよ。

一月 それは結構なことでございます。さぞ人間達が喜びますでしょう。

新しい年 ぼくはね、中でも子供達が大好きでね、あの子供達が喜んで笑つている顔を見るのがぼくは一番好きなんだよ。だから、この一年間は子供達のために、

特に子供本位にしてやろうと思つてゐるんですよ。

一月 本當に結構なお考えで。

新しい年 子供は可愛いんですよからね、いまも一人、男の子が電話をかけて來ましてね、今年はいゝ子になりますつてわざわざ約束して來ましたよ、こんなことは今までにありませんか。

一月 そうでございます……ないこともございませんでしたようで……

新しい年 そうですか。でも、そんなことはどうもいゝ、……ね、『一月』君、ぼくはこの一年を今迄とまるで違つた年にしてみようと思つてゐるんだよ。

一月 と、申しますと？

新しい年 つまり君達に一ぺんに働いて貰うんだ。

一月 (不思議そうな顔をして『新しい年』の顔を見る)

新しい年 今迄は一年を十二ヶ月に分けて、君達十二人の『月』が交代で働いてくれたんでしよう。

一月 はい。

新しい年 それをぼくは十二人一ぺんに一年中働いてもらおうと思つた。そうすれば、子供達は春も夏も秋も冬も一ぺんに持つてゐることになる。そうして冬の

好きな者は冬、夏の好きなものは夏をえらばいゝ……どうです。名案でせう？

一月 はあ、……ですが、そんなことはいまだかつてございませんでしたが……

新しい年 そうです。いままでになかつたことでしょう。今迄に無かつたようにするからこそ、今年が本當の意味で新しい年になるんじゃないやありませんか。

一月 なるほど。……いや、私はどうでも構いません。只今通り、他の月達より先に人間達の世の中をまわらせて頂きさえすれば結構なので……

新しい年 そんなことならわけのないことです……さ、早速ぼくの仕事を始めなくてはいけません。『一月』君、他の月の諸君を僕は知りませんから一寸こゝへ呼んで下さいませんか。

一月 はあ、ですが私が知つて居りますのは『十二月』と『二月』の二人だけでございませうが……

新しい年 いゝですとも、とり敢えずその人達を呼んで下さい。……そうく、君

は『三月』君とか言う人を知りませんか。

一月 『二月』から聞いて名前だけは知つて居ります。
新しい年 ついでに呼んで下さい。

一月 承知しました。

『二月』電話へかゝる。

一月 ……もしく『二月』君の家を願います……あ、もしく『二月君』ですか
(はい私『二月』です) 私は『一月』ですが、(あゝ『二月』君か、どうしたんだい、未だ年が變つたばかりぢやないか交代にはまだ一月もあるよ)、うん、そうなんだが、こんだの新しい年のだんな様がお呼びなんだ。すぐ来てくれ給え。
(そうか、それぢやすぐ行きます) あ、それから『三月』君もさそつて来てくれ給え、(あゝ承知した) ぢや、又あとで、さよなら。

『二月』電話を切る。

一月 『二月』は『三月』をつれてすぐ来るそうでございます。

新しい年 あゝ、そうですか。

『二月』又電話をかける。

一月 ……もしく今度は『十二月』君の所を願います……あ、もしく『十二月』君ですか、私『一月』です (あゝ『一月』君か、何か用かい、私は今やつと仕事が終わつて、すつかりくたびれてしまつたから寢ようと思つている所なんだ) 御苦労様でしたね、御疲れの所すみませんが、新しい年のだんな様が御呼びですから一寸来て頂きたいんですが (新しい年のだんな様が? 何の用だろう? 今すぐ行きます) じや、後程……

『二月』電話を切る。

一月 『十二月』も来るそうです。

新しい年 あゝ、有難う。

『新しい年』、浮き浮きと歩きまわる。

『一月』、部屋のすみに立つている。
やがて、戸口にノックの音がする。

新しい年

(待ちかねたように) おはいりなさい。

『十二月』『二月』『三月』の三人はいつて来る、『十二月』は中でも疲れ切つたような顔をして眠そくな眼をしている。『三月』は少しもジツとして居ない男である。

三月 どうも御待たせしました。私『三月』です。

新しい年 あゝ『三月』君ですが、よく来てくれましたね。『十二月』君、先程は失礼、折角休もうとしていた所を起してごめんなさい。君は『二月』君ですね、僕が新しい年です。(『二月』あいさつをする)さ諸君どうぞこちらへいらつしやい。……皆さんに来て頂いたのはほかでもありません。今も『一月』君には話したんですが、今年は特に子供達本位の年にしようと思ひますので、今迄になかつたような楽しい年にするつもりです。それで、今までと全然やり方を変えて君たちに一べんに働いて貰おうと思うのです。

三月 そりや面白い。そりやきつと子供が喜びますよ。

新しい年 ぼくもそう思ひます、春と夏と秋と冬が一べんにあつたら子供達は一年中何の遊びでも出来るわけですからね。……えゝと、これで四人……あと八人居るわけですね、だれか他の人を知りませんか。

三月 私は全部知つています。一寸一ツ走り行つて皆を呼んで来ましようか。

新しい年 ほう、皆知つていらっしゃるんですか、それは丁度いゝ、御願ひします。

三月 ぢや、一寸行つて来ます、皆喜んで来ますよ。

『三月』急いで出て行く。

新しい年 どうです『二月』君と『十二月』君、御意見は……

二月 私は別に意見はありません、たゞ私は皆より体が弱いものですから、今までほかの『月』より働く日数が二日短かくていゝことになっていました。ですから、他の『月』より少し仕事の分量さえ少なくてよろしければ結構なことだと思います。

十二月 私はくたびれて眠くて眠くてたまりません、少し眠つてからでよければ、かまいません。

新しい年 いゝですとも、私は何も無理に働けと言うのではありません。たゞ、子供達がいつでも何でも好きなことをして遊べるようにして下さればいゝんですから。

戸の外で大勢の氣配がする。「三月」を先頭に「四月」「五月」「六月」「七月」「八月」「九月」「十月」「十一月」がドヤ／＼とはいつて来る。

夏の『月』達は寒さでふるえている。

そして季節別に三人づゝ並んで立つ。

三月 皆つれて来ました。皆さんこの方が今度の『新しい年』のどんな様です。

一同あいさつする。

新しい年 やあ、皆さんよく来て下さいました。ぼくが『新しい年』です。さて今日お集り願つたのは……

三月 あ、そのことは今来る途中で皆に話して置きました。

新しい年 そうですか、では重ねてクダクダしくは申しません。この『三月』君からお聞きのように、ぼくは今年はすべて子供本位の年にしようと思つています。

で、どの子供でも思つた通りのことをして遊べるように、つまり冬の好きな子には冬、夏の好きな子には夏と言う風に、一ぺんにすべての子供達の願いを聞いて

やるために、諸君全部が一度に働いて貰いたいのです。

一同、今更のやうにガヤ／＼始める。

新しい年 静かにして下さい。それから皆さんにお願いしたいことは子供達が幸福に遊べるためなら、何でも出来るだけのことをしてやつてもらいたいことです。

そのつもりでどうか。

三月 どうです、諸君面白いぢやありませんか、私はこう言うことが大好きです。

一同、更に大きな聲でガヤ／＼言う。

一月 私は雪と氷を持つて行く、そして子供達にスキヤやそりやスケートで遊ばせてやるつもりです。

五月 でも、あたし困りましたわ。今年の着物をまだ作つてないんですもの。

三月 去年のでいゝじやないか。

六月 私はほたるを持つて行つてやりましょう。

七月 私はとんぼやせみを持つて行つてやります。子供達はとんぼつりが大好きですから。

八月 私は海岸の砂浜をジリ／＼にあつくしてやりませう。子供達が海水浴が出来
るように。

新しい年 どうです『九月』君は。

九月 私は冷しい風を持つて行つてやります。第一子供達は私がまわつて行くと皆
『学校が始まつてうれしいな』と言いますよ。

七月 私が行くといつも子供は『夏休みになつてうれしいな』と言いますよ。
一同、又ガヤ／＼となる。

新しい年 とにかくさつき、子供が電話をかけて来て、今年は一ツお兄さんになつ
たから、去年よりも一生懸命やるんだつて約束して来ましたよ。さ、もつと相談
したいことがありますけれど、それは又いづれのことにして、そろ／＼出かけて
下さい。

一同又ゴタ／＼する。

三月 さ、諸君行きませう。

一月 私が一番先に行きますよ。

新しい年 ちや、皆さん、子供達を楽しく遊ばせてやつて下さいよ。

一同、『一月』を先頭に出て行く。

『新しい年』、窓から見送る。

やがて机の前に戻つて来る。

新しい年 さあ、これでまず一段落済んだ、これでいゝ。これでいゝ。
と、得意氣にいすにすわる。

—幕—



隆一と良子のおばあさん



健二



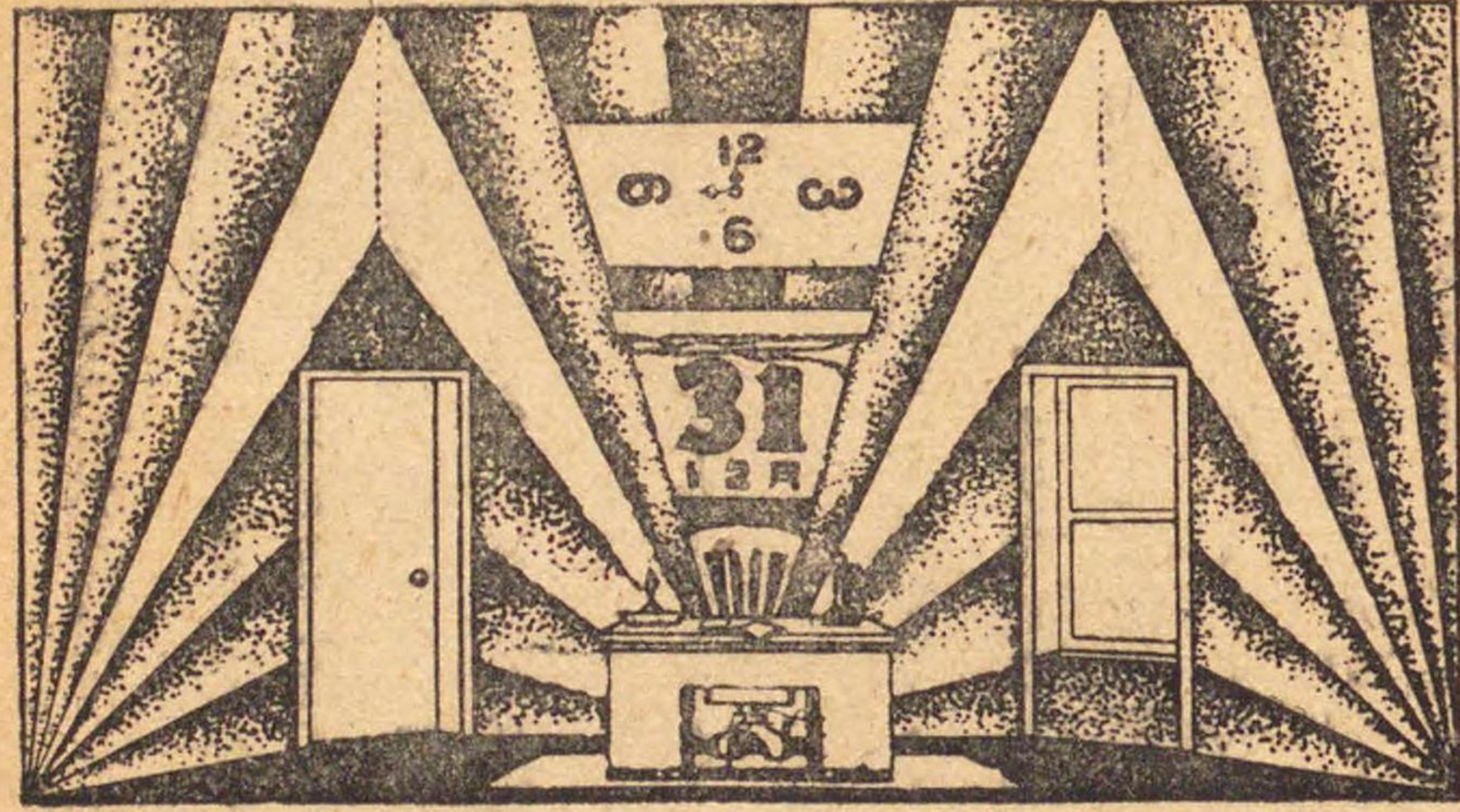
隆一



雪江



良子



第二場
隆一君の部屋

第二場 隆一君の部屋

幕が上ると隆一君と良子さんの子供部屋。正面に扉、上手、下手にそれぞれ大きな窓があり外がよく見える。窓の下にそれぞれ隆一君と良子さんの勉強机がある。上手の隆一君の机の所の窓からは雪景色が見え雪が降っている。隆一君は一生懸命にそりを作っている。

下手の良子さんはストーブに當りながら本を讀んでいる。

隆一君、歌を歌いながらトン／＼やつている。やがて、下手の窓の外が明るくなつて雪が止み、日が當つて来る。

良子 (氣が付いて) あら？……あら、兄さんお天氣になつて來たわ。

隆一 え？。お天氣に？ (顔を上げ上手の窓の外を見る) 何を寢ぼけてるんだい、うそつけ。まだあんなに降っているぢやないか。もつと降れ、もつと降れ、もつと降つて積もつた方がよくすべるぞ。スーツ、スーツとね。

良子 あら、うそなんかつかないわ。ほら、あんなにいゝお天氣になつて日が當つて來たじやないの。

良子、窓の所へ行つて外をながめる。

隆一 (これに答えず) さ、もう片ツ方打ちつけりや出來上りだ。

歌を歌い乍ら、トンカチ／＼と始める。

良子 ……ね、兄さん、兄さん、見てごらんさい。雪がどん／＼溶けて行くわよ
お日様がとてもキラ／＼して夏みたい。

下手の窓外の景色、初夏のような感じになる。

隆一 さ、出來た。出來た。出來た。出來た。(出來上つたそりを持つて踊り出す)

良子 あら、おばあさんが帰つてらしたわ。

隆一 さ、すべりに行くんだ、良子も乗せてやるから、仕度おし。

良子 すべりに行くつたつて、兄さん。雪なんてありやしないわよ。

隆一 (上手の窓を見て) ばか言え、ほらあんなに降つて、ドン／＼積っているじやないか。

隆一、仕度をする。

おばあさん下手の窓外を通つて歸つて来る。

二人 おばあさん、お帰りなさい。

おばあさん はい、たゞ今。やれ／＼くたびれた。まあ、何て変な氣狂いお天氣な
んだらうね。

隆一 おばあさん、ぼく、そり作つたんだよ。ほらね、いゝでしよう？ ね、おば

あさん、そりですべりに行つてもいゝでしよう？

おばあさん いけません。もう少しお待ちなさい。今も歸つて來る途中で、雪が降
つているかと思うと、風が吹き始めるし、あの角まで來るとどうだい、お日様が
ギラ／＼してまるで夏みたいじゃないか、雪はどん／＼溶けるしさ。私はこの年
迄こんなばかな氣狂いお天氣を見たことはないよ、こんな陽氣には外へ出てはだ
めです。お家で大人しく遊んでいらつしやい。本当に変なお天氣だつたらありや
しないよ。

隆一 ちえッ、つまらないな。折角作つたのに。おばあさん、ほらあんなに降つて
いるじゃないか。

良子 あら、うそばつかり。あんなにいゝお天氣で日が当つているじゃないの。

(窓から外を見る) あら？ 雪江さんが來たわ、雪江さん！

下手の窓の下を通つて雪江が來る。

良子、ドアを開けてやる。

いらつしやい。

こんちわ、良子さん。遊ばない？

えゝ。丁度いゝわ、おばあさんが今日はお家で遊べつておつしやるから、こ

のお部屋で遊びましょうね。

雪江 えゝ、あ、おばあさま、こんちわ。

おばあさん はい、こんにちわ。雪江さん。今日はお天氣が悪いからお家で遊びな

さいな、あとでおいしいお菓子を作つて上げますからね。

良子と雪江の二人、下手寄りて遊び始める。おばあさんは真中に腰かけて編物を始める。

良子 兄さん、おまゝごとするからはいらない？

隆一 おまゝごと？ いやだよ、そんな女の遊ぶことなんか、ぼくは權ですべりに

行くんだ。(窓の外を見る) おや、あすこから來るのは、健ちゃんじゃないかな。そ

うだ。やつぱり健ちやんだ。おおい健ちやん。

健次、上手の窓の外を通つてはいつて来る。手にやはり手製のそりを持つて居る。

健次　こんちわ。隆一君、僕ね、そり作つたんだ、一緒にすべりに行かない？

隆一　あゝ、君もそり作つたの？　ぼくも今やつと出来つた所さ。ほらね。(と見せる)

二人、各々自分のそりを見せ合う。

下手の二人の女の子は窓からはいつて来る陽差しが強い爲、だんくんと暑くなる。

良子

ねえ、雪江さん。あなた暑くない。私すつかり暑くなつちやつたわ。

雪江

私もよ。

二人、上着を脱ぎ始めると。

おばあさん

そんなに暑くなつたのかい？　でも氣を付けないといけないよ。

雪江

えゝ。私、家出る時もやつぱりこんなに暑かつたの。でも出ようとするとお

母さんが、この上着を着て行かなくちやいけないつておつしやるんでしよう、でも途中で雪が吹雪になつて、着て来てよかつたなつて思つたけど、又暑くていら

なくなつたわ。

良子

本当に変なお天気ね。

おばあさん

きつとお天氣がどうにかなつちまつたんだよ、今に又きつと急に又寒くなるから、風邪をひかないように氣を付けないといけないよ。私には今が冬なのか、春なのか、夏なのか、さつぱり分らなくなつちまつたよ。

隆一

ね、おばあさん。ぼく等うんと厚着をして行くから、そりですべりに公園まで行つてもいゝでしょう？

おばあさん

でも、こんなに暑いんですから雪なんかもう溶けてしまいましたよ。

隆一

そんなことないよ。ほらまだあんなに……(上手の窓の外を見ると雪はやんでいる)　あら、もう止んぢやつた。丁度いゝや。ね、行つてもいゝでしょう。

良子

(下手の窓を見て)　あら、今度は雨が降つて来たわ。

隆一

なに、雨だつて？　(上手の窓の所へ行つて外をよく見る)　どこに雨がふつているんだい。雲一つありやしない、いゝお天気だよ。

良子

いゝえ、確かに降つているわ。ねえ、雪江さん。

隆一 ばか言え。おばあさん、おばあさん、こゝへ来てごらんなさい。確かにお天氣で雪はまだ積つているでしょう。

おばあさん あいよ。(と窓の所へ行き)あゝ、成程ね。

良子 ね、おばあさん、こつちへ来てよ。ほら確かに雨でしょう。

おばあさん あいよ。(と下手の窓へ行く)あゝ、成程ね。

良子 確かに雨でしょう。

おばあさん あゝ。

隆一 雨なんか降つてませんね。

おばあさん あゝ、私にはどつちとも言えないよ。隆一の言うことも良子の言うことも、どつちも本当だからね。本当に不思議なお天氣で氣味が悪いね。……さ、こんな日は外へ出ていきません。何があるか分つたものじゃない。さ、今お菓子を持つて来て上げるから、お家でおとなしく遊びなさい。

おばあさん、退場。

健次 あ、又雪が降つて来た。

雪江 いゝえ、雨よ。

隆一 雨でも何でもいゝ、雪が溶けない中に早く公園へ行つてすべつて来よう。

健次 うん、そうしよう。

良子 行くんなら私達もつれてつてよ。

隆一 あゝ、じゃ早く仕度して。

四人仕度を始める。

やがておばあさん、お菓子を持つてはいつて来る。

おばあさん さア、さア、お待ちどうさま。おやお前達、どうするの。

隆一 雪の溶けない中に公園へ行つてすべつて来るんです。

おばあさん すべる？ お前達外を見てごらん、もう雪なんかとうに溶けちまつて

まるで夏みたいですよ。暑くて……

子供達 え？

四人の子供それぞれ窓の所へ行く。

隆一 あ！ 本当だ。

良子 本当だわ。

窓を開ける。

健次 あ、外はこんなに暑いや。

隆一 泳ぎに行きたくなつちやつた。

良子 本当。暑いわ、汗がこんなに。

一同着ているものを脱ぎ始める。

するとにわか稲光りがして雷が鳴る。

雪江 あら、雷様だわ、私、こわいわ。

あたりだんく暗くなる。そして夕立の様な雨になる。

隆一 あ、夕立だ。夕立だ。すごい。

おばあさん さ、皆。早く窓を閉めなさい。

窓を閉めると夕立だんくひどくなり、風まで加はつて来る。

良子 あら、風が出たわ、まるであらしみたい、私、こわいわ。

おばあさん さ、皆、こつちへおいで。一体、これからどうなるんだろう。

皆一トかたまりになる。あらしますすくひどくなる。

間

あらしだんく静まり始め止む。やがて隆一、恐る恐る頭を上げる。

隆一 (あたりを見まわし) あア、やつと止んだ。もう大丈夫だよ。

おばあさん やれく本当は何てお天気なんだろうね。

良子 あら、きれい。虹よ。ほら。

両方の窓に美しい虹がかかる。

幕

第三場 またもとの『年』の部屋

第一場と同じ『年』の部屋である『新しい年』が疲れていらいらしながら部屋中を歩きまわっている。
電話のベルが鳴る。

新しい年 もしく。(あ、もしく。こちらは『三月』です) あ、『三月』君です

か、どうです？ 工合は？（え、うまく行つています。）子供達は喜んでいますか？（え、今までにこんなよおきは見たことがない。冬みたいで夏みたいだと言つて喜んでいます）喜んでいて。そりやけつこうです。それでこそ、今までにないやり方をしたかいたがあつたといふものです。で、御用は？（い、え、た、その御報告をしたかつたので、別に用じやありません。）あ、そうですか。それはわざわざありがとうございます。どうかしつかりやつて下さい。（え、御安心下さい。では又）ちや、御願いますよ、さよなら。（ごめん下さい）

電話、切れる。『新しい年』まんぞくそうに歩きまわる。

新しい年 子供達は冬みたいで夏みたいだといつて喜んでいてつてたな。それはそのはずだ。十二人の『月』が一つべんに飛び歩いているんだものな。これはいゝんだ。これでこそ今までになかつた本当に新しい年になつた。

戸をたたく音。

新しい年 おや？ だれか来たな、おはいり。

『一月』がはいつて来る。

新しい年 やあ、『一月』君か。さ、さ、こつちおはいりなさい。いろくくと御くろう様です。さぞお忙しいでしょう。

一月 忙しかろう……とおつしやるんですか？

新しい年 え、どうしてです？ 忙しくないんですか？

一月 忙しいにも、忙しくないにも、どうにもこうにも御話になりません。なにもかもめちやくちやです。

新しい年 めちやくちや？ それは又どうしてです。今しがたも『三月』君からうまくいつていると電話をかけて来たばかりです。

一月 『三月』ですつて？ あいつはあてにならない奴です。いゝかげんな氣の変り易い男です。ですから、人間達も三月のお天氣はあてにならないと言つていろいろいいます。

新しい年 で、何の御用でしょう。

一月 実は皆で折入つて御願いに上つたのですが。

新しい年 御願ひ？ 皆で？ 何ですか？

一月 困つてしまいましたので、皆で集つて相談した結果、私が代表で参りましたのですが。

新しい年 代表で？ で、皆さんは。

一月 外で待つて居ります。

新しい年 そりやいけない。皆さんも中にはいつてもらつて下さい。

『一月』戸を開けて呼ぶ。『二月』以下『十二月』迄、『三月』を除いて十人が、はいつて来る。

新しい年 おやく、皆さん御一緒ですね、どうしたと言うんです？

一月 私達はおつしやり通り皆で一緒に働きました。そして出来るだけのことをしたつもりです。けれどもけつきよく、何にもならないことが判つたのです。

新しい年 何にもならない？ と言うと？

一月 何も出来ないのです。子供達を遊ばせてやりたくとも、どうにもならないのです。

新しい年 どうしてです？

一月 私や『二月』君や『十二月』君は、雪と水で子供達を遊ばせることしか知りませ

ん。けれども私達がいくら雪や水を持つて行つても、『七月』君や『八月』君が側を通ると皆溶けてしまうので、子供達は今年になつてからまだ一つべんもスキーやスケートやそりで遊べません。

四月 私達もそうです。私と『五月』さんは木や草の芽を呼びさまして野原や山を緑色にします。そして子供達にピクニックやハイキングをさせて遊ばせるつもりなのですが、いくらいつしようけんめいにやつても、私達の後から『十二月』さんや『一月』さんや『二月』さんが通ると、芽が皆凍えて死んでしまうのです。

八月 僕達もそうです、僕達夏の『月』は、水遊びや山登り、とんぼつりやせみ取りで子供を遊ばせるつもりなのですが、子供達が水遊びをしようとして裸になると急に寒くなるのでかせをひいてしまいます。とんぼやせみは皆土の中から出て来ません。

十月 『四月』さんや『五月』さん達春の月が芽を呼びさましても皆枯れてしまうので、私達は何もする仕事がないのです。赤や黄に色を染め変えてやる木の葉がありません。花が咲かないのですから、木の実やくだものだつてみせようがある

りません。第一に子供達はあまりようきが変わるんでかぜをひいてせきをしたりく
しやみをしたりしています。

新しい年 そりやいけない。どうしたらいいでせう。

一月 どうしたらいいか我々には判りません。私達はたゞあなたのおつしやる通り
に働くほかありません。あなたのお考えでこうなつたのですから、どうしたらよ
いかもあなたが考えになるほかありません。

新しい年 だから、皆さんもぼくと一緒に考えて下さいと御願ひしているんです。

一月 でも、私は今年始めてこんなことをしたのですから、どうしたらよいかなど
ということとはとても考えられません。

『月』達一同、ガヤ／＼とめい／＼に何か言い始める。

新しい年 よろしい、では僕は三月君に相談して見ます。『三月』君はどこに居ます？
一月 さあ、どこですか。あいつだけは今度のやり方を喜んでそこら中飛び歩いて
いますから。

『新しい年』戸口へ行って外へ呼びかける。

新しい年 ……『三月』君一ツ。『三月』君一ツ。(遠くで返事が聞える) おゝい。一寸来て

くれ給え。

やがて『三月』急いではいつて来る。

三月 おやく／＼、皆、集つていますね、何の御用でしょう。私は今とても忙しいん
ですが。

新しい年 いろ／＼困つたことが起つてしまいました。まあ、こつちへ来て聞いて
下さい。

三月 何をそんなにお困りなんです。

新しい年 うまく行かないんだ。皆に一ぺんに働いてもらつただけけれど、けつき
よく何にもならないんだそうだ。

三月 そんなことはありません。さつきも御電話したように子供達は珍しがつて喜
んでいます。

新しい年 でも子供達は何もして遊べないそうじゃありませんか。

三月 えゝ、でも窓から外を見て楽しんでいます。

これを聞いて一同ガヤ／＼とさわぎ始める。口々に『三月』の悪口を言う。

新しい年 皆さん、待つて下さい。そう一度に皆がしやべつてもわかりません。

三月 一人づゝいい給え。一人づゝいわなくちやはずきりわからない。

十二月 そうさ、だれもお前と一緒にしやべりッこをする者は居ないからな。

新しい年

まあ／＼、そうけんかをしないうで静かにして下さい。とにかく今伺つた

様なことではどうにも仕方がありません、何とか皆さんがそれぞれの得意のお仕事で子供達を喜ばせて下さらなくては何にもなりません。では『十一月』さんあなたはどうすれば子供達を楽しませることが出来ますか。

十一月

私は『八月』君達、夏うけもちの諸君がくだものを充分大きくしておいて

くれさえすれば、それを赤く熟したおいしいくだものにしてやれるのです。

十月 私も夏の間、木の葉が青く大きくなつてさえいれば、赤く染め変えられます。

九月

私もそうすれば木の葉を黄色く染めますし、涼しい風をふかして夏の暑さを忘れさせて、学校の勉強を始めさせます。

新しい年

では、『八月』君は？

八月 私は『七月』君さえ準備をして置いてくれれば、暑い暑い真夏の太陽を持つていつて水浴びをしている子供達の体を真黒にして、冬になつてもかぜをひかないようにしてやります。

七月

私は『六月』君がつゆの雨をどんどん降らして、色々なものが生長する準備をしてくれれば、それを『八月』君にひき渡してやれます。

六月

私は『五月』さんが春から夏になる用意をしてくれて、いゝお天気を続けて雨をためて置いてくれさえすれば、つゆの雨を澤山降らせてやれます。

新しい年

ちや『五月』さんはどうです。

五月 私は『四月』さんが木や草の種をまいて目を覚まして置いて下されば、ゆつくりと優しい子守歌を歌つて、その芽を育て、花を咲かせ、葉をしげらせてやれますわ。

四月

私は『三月』さんが冬の寒さを和げておいてさえ下されば種をまきますわ。

三月

ほら、じやけつきよく僕が皆の一番のもとしやないか。

一月　そうは行かないよ。我々冬の寒さがあるから、始めて春の暖かさがわかるんじゃないか。

新しい年　わかりました。今の皆さんの御話をうかづつてよくわかりました。すべて規則通りに出来ているのですね。規則通りに順番をきめて、順番に働いてもらふのが一番よさそうです。『一月』君はどう思います。何かいゝ考えがありますか。

一月　これまで通りにするのが一番いゝと思います。

新しい年　これまで通りというところ。

一月　一十月に一人づゝ、つまり十二人が一十月づゝ順番に働くのです。始めの月は私がやり、次の月を『二月』君がやるというわけです。つまり暦通りというところです。

新しい年　成程、今迄通りということですね。『一月』君の次が『二月』君、その後が『三月』君。

三月　そうです。私の後が『四月』さんと『五月』さんで……

新しい年　君はだまつていゝくれ給え。

三月

………

新しい年　つまり番号順ですね。

一月　えゝ、昔からこの順番でやつています、それが一番間違いのない道なのです。

新しい年　わかりました。……さて諸君。思うところがあつて、私は私の考えた新

しいやり方を止めて、これまで通りにやつて見ることに決心致しました。

『月』達、喜んで拍手する。

三月　それはとてもすばらしいお考えです。私も大賛成です。

新しい年　君は黙つていてくれ給え。皆さんおわかりですか。今まで通りにするのは、私が新しいと思つてやつたために、皆さんに色々とおめいわくをかけて申しわけありません。私は十二人が一十月づゝ働くのと、十二人が一ぺんに働くのと同じことだと思つていました。つまり1×12と12×1とは同じ答ですから同じことだと思つたのです。それが私の間違いでした。お詫びします。……さ、でわ早速『一月』君から御願ひします。あとの皆さんは自分の番の来るまではゆつくりと休んでいて下さい。色々とおくろう様でした。

こうして豆は
煮えました



『一月』を残してあとの『月』達、口々に別れのあいさつをしながら出て行く。『新しい年』見送る。
一月 では、行つて参ります。

新しい年 あゝ、では宜しく御願ひしますよ、子供達を面白く遊ばせてやつて下さ
い。

一月 しようち致しました。

『一月』も出て行く。『新しい年』一人残る。ぼんやりと机の前に座る。

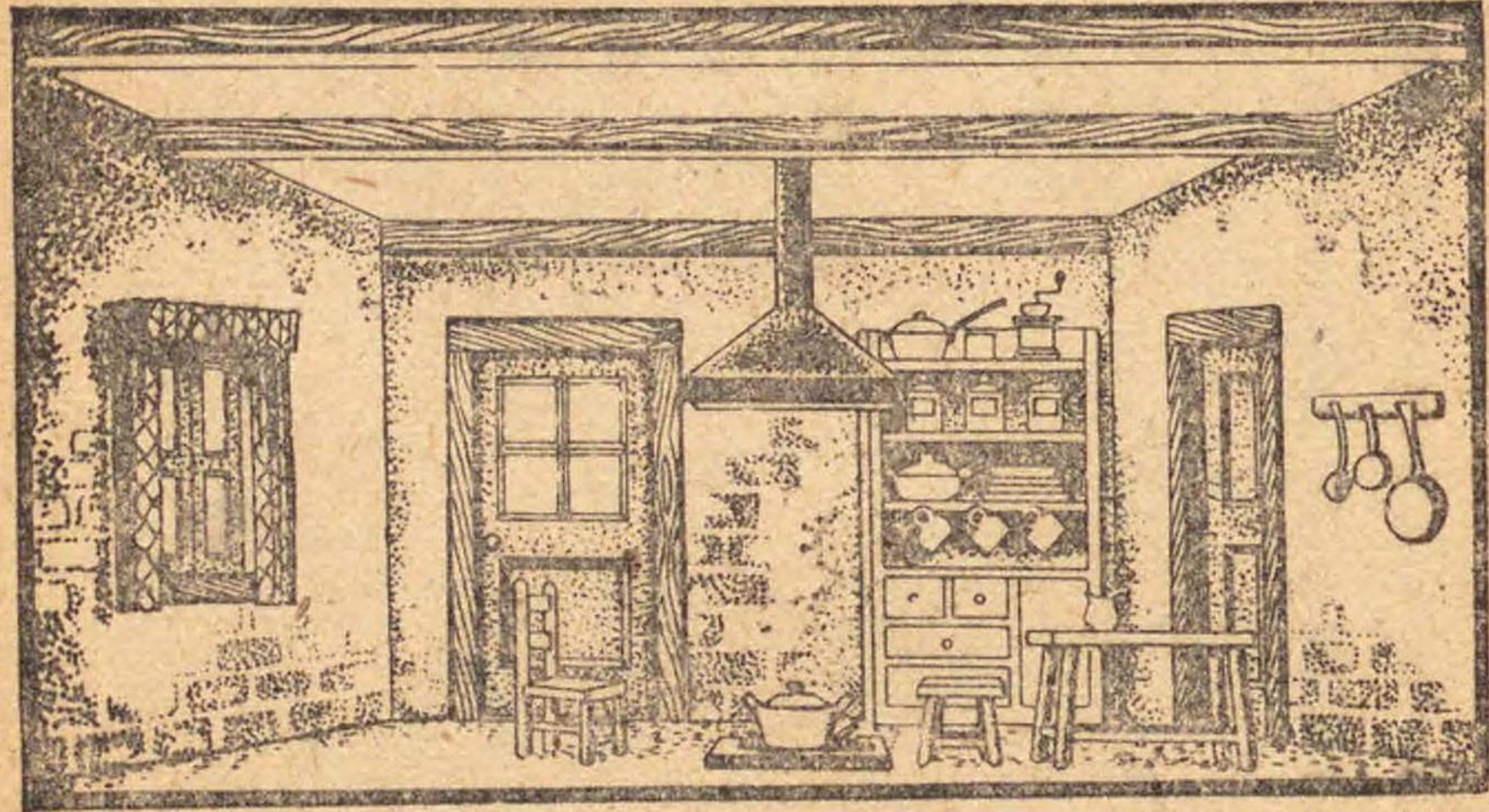
新しい年 ……おかしいな、 1×12 は12だ。 12×1 も12だ。それなのにうまく行か
ないなんて、どういうわけだろう。

『新しい年』考え込んでしまう。

やがて遠くで子供達の遊んでいる聲が聞える。

新しい年 おや、子供達の声だな。(と、窓の所へ行き見下す) あゝ、子供達がそりに乗
つて遊んでいる、喜んでいる、あゝ轉んでも又滑つている。……これでいいんだ。
……これでいいんだ……

—— 静かに幕 ——



こうして豆は煮えました



人物

子供
王女
手品師
近所の娘
盲
歌うたい
首きり役人

幕が上ると舞臺は臺所。正面に戸口（兩開きの方がいい）、と窓（そとにお城が見える）上手には次の部屋に通ずるドア、下手に大きな調理用のストーヴ。中央に椅子テーブル、その他壁には食器棚等がある。

る。ストーヴの上には大きななべがかかっている。舞臺には誰もいない。

やがて子供が上手のドアから出て来る。そして鍋のふたを取つて見る。湯気がサツと上つてお湯はグ
ラ／＼煮え立っている様子である。子供はそれを見て棚からざるを下して中のそら豆をなべの中にザア
ーッとあける。そしてふたをして又出て行つてしまふ。

やゝ長い間

口上が下手のそでから出て来る。

口上

（中央に来て）皆様、今日はよくいらつしやいました。これから『こうして豆は煮えました』と言うお芝居をお見せ致します。ですが、私はこのお芝居へ出るんじやありません。私はお芝居の始まらないうちにいろんなことを皆様にお教えして置こうと思ひまして今こゝへ出て参つたのです。……さて、皆さん、こゝは何でしょう。……そうお台所ですね、もちろん日本のお家のお台所ではありません。このお芝居が西洋のおはなしなんですもの、むかしむかしのそのむかし……それ程の昔ではありませんが、西洋のあるお城のある町におこつたおはなしです。ほら、あの窓からお城が見えるでしょう？（ト窓の所へ行つてのぞく）皆さんからは見え

ないかも知れませんが、あのお城には四ツの高い塔が立っているんです（も
とへもどる）そしてその四ツの塔には一ツづゝ時計がついています、大きいのが一
ツ、中位のが二ツ、小さいのが一ツです。あの四ツの塔についてゐる四ツの時計
はこのお芝居にとても大事な時計ですからよく覚えていて下さい。そうく、そ
れからあすこに大きなおなべがかゝつていますね、そして今男の子が出て来てそ
ら豆を入れて行きましたね。あの子はこの家の男の子なんです。そしてお母さん
と二人で暮しているんですけど今お母さんはお買物に行つておるすです。あの子
は大変感心な子ですから、おるす番をしながらあつちのお部屋で勉強しています。
お母さんが出がけにお晝に豆を煮てお置きなさいといつたのを思い出してさつき
あゝして豆をおなべに入れに來たんです。そうくもう一ツ面白いことを教えて
上げましょう。あのお城できのうの晩、お隣の國と仲直りの大宴会があつたんで
す。その時王女様が大変お行儀の悪いしくじりをしてしまつたんです。それでお
城の法律によつて今日の十二時、あの四ツの時計がなると同時にお仕置になるん
です。その王女様はそれはそれはきれいな可愛らしい方なんですけど、お首を斬

られるなんておかわいそうですね。けれども今朝つからその王女様の姿がお城中
どこをさがしても見えないんです。それで今お城では大騒ぎをしてゐます、さあ
その王女様はどうなるでしょう。それはこれから始まるお芝居をご覽になれば
わかります。とにかくあのおなべの中のそら豆が煮えるまでの間のお芝居です
（なべの所へ行つて中をのぞく）まだく仲々煮えませんが、そうく、私がこゝにか
うしておしやべりをしていては、お芝居が仲々始まりませんからこの辺で私はひつ
こみましよう。じゃ、皆さん、静かにゆつくりご覽下さい。……

口上、退場。

上手のドアから男の子が又出て来る。

男の子　あーあツ、もう勉強もくたびれちやつた。お母さん、早く帰つて來ればい
くなア。

男の子、なべの中を一寸のぞいて見て、いゝに腰をかけ鼻歌をうたい始める。——間。
王女が窓の外にしのび寄る。そして中をのぞき込む。やがて戸を開いてそつとはいり後手にドアを閉めて
ホツとする。大きなマントをおつている。

男の子 (気が付いて) おや、あなたはだれです？

王女 シーツ、静かに。坊ツちやん一人？

男の子 えゝ。だけどあなたは、一体どなたです？

王女 ね、坊ツちやん。私をどこかへかくしておくれ、一寸の間でいゝんだから誰にも見つからない所へかくしておくれ。

男の子 かくす？ あなたを？

王女 えゝ、何でもいゝからかくしておくれ。私は今みつかると殺されてしまうの。

男の子 殺されるんですつて？

王女 あゝ、首をきられてしまうのよ。

男の子 首をきられるんですつて？ あなたみたいにきれいな方がどうして首をきられなくちやならないんです？

王女 私がお行儀が悪かつたから。私が作法に違つたことしたからいけないのよ。

男の子 作法に違つたことつて何です？

王女 とてもいけないこと。そんなことをすれば首をきられるつてお城の法律で決

つていることをしてしまつたのよ。」

男の子 ホウリツ？

王女 えゝ、法律つてのはね、王様のおきめになつた規則のことよ。

男の子 でも、どうしてあなたがお城の規則で首をきられるんですか？

王女 それはね、私が王様の娘だからよ。

男の子 王様の？……じや、あなたは王女様ですか？

王女 えゝ、そうよ。

男の子 でも、お母さんがいいましたよ。王女様つていう方はとてもきれいでりつばな方だつて……貴女はともきれいだけど……

王女 (自分の姿を見て) あゝ、これを着ているからね。(とマントを脱ぐ、きらびやかな王女の服となる) どう？ これなら……

男の子 やあ、きれいだ。やつぱりあなたは王女様にちがいない。

王女 わかつたでせう。ほんの一寸、お晝を過ぎるまで私をかくしてくれゝばいゝのよ。そうすれば何でもすきなものをこほうびに上げてよ。

男の子　ごほうびなんていらなないけれど、あなたみたいにきれいな立派な方が首を
きられるなんて……いくらでもかくして上げますよ。……だけど、僕のところは
こんなにせまいんですもの、どこがいゝかな……

王女　どこでもいゝのよ。

男の子　うん、そうだ、いゝ所がある。お母さんの寢床がいゝ。　ねエ、でもそ

の前に、どんなお行儀の悪いことをして首をきられるのか教えて下さいな。

王女　えゝ、でもだれか來ると……

男の子　ぼくがこゝから見ているから、大丈夫ですよ（と、窓の所に行く）

王女　じゃ、お話ししましょうね、昨日の晩お城ではお隣の国と仲直りをしたお祝
いの宴会があつたのよ、その宴会で私、うっかりして大おば様のダイヤモンドの
ついたお靴をふんでしまったの。

男の子　ごめんなさいッていわなかつたんですか？

王女　もちろんいつたわ、でもね、だめなの。大おば様の宝石の飾りのついたおく
つを踏む様な不作法な王女は、翌る日のおひるにお城の塔の四ツの時計が鳴つて

いる最中に首をきられるという法律があるのよ、だから、どうしても私は、今日
のおひるにあの四ツの時計がなつている中に首をきられなくてはならないの。

男の子　そんなめちやくちやな規則なんてないや、どうしてそんなめちやくちやな
法律なんてものやめてしまわないますか？

王女　それは私もそう思うわ、でも、私の力ではどうにもならないの、昔から決つ
ていることなんですもの。でも私は首をきられるのはいやでしょう？　だから今
朝早くお城をぬけ出してかうして逃げてまわつているの。

男の子　だれか追つかけて來るんですか？

王女　私がいなくなつたものだからお城では大さわぎをしてみんなして私をさがし
まわつているわ。

男の子　でも、どうしておひるまでかくれていればいゝんですか？

王女　それはね、法律によると、おひるをすぎて四ツの時計が十二時を打つてしま
へば私の命は助かるのよ。

男の子　どうしてです？

王女 どうしてもそれも法律なのよ。

男の子 へえ、法律つて変なものなんだなア、(外を見て) あッ、だれか来る。王女様
こつちへいらつしやい。お母さんの寢床へかくれて下さい。お母さんは今お使い
に行つてますから、お母さんの代りに寢床へ寢ていらつしやい。だれか来たら、
お母さんは病氣で寢ているつて追つ拂つてやります。

王女 え、ありがとうございます。

男の子 さ、早く。早く。

男の子、王女を上手のドアからつれて行く、やがて一人で出て来る。そして何食はぬ顔で鼻歌をうたいな
がら歩きまわる。窓の外に手品師が通りかゝる。そして窓から中をのぞく。これに氣がついて男の子びつ
くりするが知らぬ顔をする。

手品師 (窓から首を出して) こんにちはわ。坊ちゃん一人ですか？

男の子 あなたはだれです。

手品師 エへ、、私は通りがりの者ですがね(鼻をヒクヒクさせて) おや、いゝにお
いだな、こりや豆のにおいだ。坊ツちゃん、豆を煮ているんですね。

男の子 そんなことどうだつていゝじゃないか。第一ひとの家を窓からのぞくなん
て失礼だよ。

手品師 じゃ、ドアからはいらしてもらいましようかね。

男の子 だれがはいつていゝつていつた？

手品師 まあ、そう私をさらわなくてもいゝじやありませんか(ドアからはいつて来る)
ごめん下さい。こりや中へはいるとますくいゝにおいだ。おや、このなべです
ね。(なべの方に行きかける)

男の子 いけないよ、豆はまだ煮えやしないよ、一体あなたはだれ？ お城のお役
人ですか。

手品師 私ですか、私がお役人かつていうんですか？

男の子 ……………

手品師 私がお城のお役人だつたらどうするんです？

男の子 あなた、本当にお役人なんですか……(だんくんとすさりしながらポケットからき
れいな鎖を出す) もしあなたが本当にお役人だつたらこの鎖をあげるから帰つて下

さい。

手品師 ほう、その鎖を私にくれるんですか。で、もし私がお役人ぢやなかつたらどうします？

男の子 あなた、一体どつちなの？

手品師 は、あ、坊ツちやんはお役人がこわいんですね。

男の子 こわくはない、こわかないけど、ぼく、お役人に今用がないんだもの。

手品師 成程ね。

男の子 ねえ、この鎖、きれいでしょう。ぼくがとても大事にしている鎖なんだけど、これを上げるから帰つて下さい。

手品師 ありがとう。だけど坊ツちやん、折角だけど私の方がもつといふ鎖を持っているからその鎖はいりません。大事にしまつときなさい。(手品で何も無い所から鎖を引ッぱり出す)ほら、ね。

男の子 (驚いて)あれ、小父さん、どこから出したの？ その鎖。不思議だなア。

手品師 はッはッは……不思議でしょう。

男の子 まるでいつかお祭の時に見た手品みたいだ。

手品師 ほら、見ていらつしやい(と、鎖を見えなくしてしまう)ほら、無くなつた。

男の子 あれ。うまいなア……おぢさん、おぢさんは、手品師なの？

手品師 そう。手品師ですよ。

男の子 なあんだ。それで安心した。

手品師 安心？ どうして？

男の子 うん、どうして？もないけど……ねえ、おじさん、もつと手品みせてよ。

手品師 私の手品が見たかつたら私と一緒に仕置を見にいらつしやい。

男の子 どうして？

手品師 お仕置場で色んな手品を使いますから見にいらつしやい。

男の子 お仕置場で。

手品師 そうです。あすこには今日は王女様のお仕置があるから見物人が澤山来る

でしょう。

男の子 でも、その人達はお仕置を見に来るんだよ。

手品師 え、だからそのお仕置が終つて皆がゾロ／＼帰り始めた時に、私はその真中に飛び出すんです。

男の子 それで？

手品師 それで大きな聲で、『さあ／＼お立ち合いの皆さま。御用と御急ぎのない方は一寸お待ち下さい。』ツてどなるんです。

男の子 すると、どうなるの？

手品師 すると皆は立ち止つて私のまわりに集つて来るに決つています。そこで又こうどなるのです。『こゝに控えましたるは、おなじみの手品師でございます』すると誰か『手品をやれ』つていうに決つてゐるんだ。

男の子 誰もそう言わなかつたら？

手品師 大丈夫、必ずいうに決つてゐるんです。そこで『では、始めは小手調べ、五ツ玉のあしらいとございませす』(玉を五ツ出して身構える)

男の子 それで？

手品師 (急に止めて) そうだ、何時頃かしら。

男の子 ねえ、おじさん、この先やつて見せてよ。

手品師 それより何時かな(窓からお城の時計をのぞく) おやく／＼これは大変だ。早く行かないといふ場所がとれなくなつてしまふ。

男の子 ねえ、小父さん、見せてよ。

手品師 だから一時にお仕置を見に行けばい／＼ぢやないの。

男の子 でも、僕、おるす番なんでも。お母さんが歸つて来なげりや外へ出られ
ない。

手品師 そうか、そりやおか哀そうだね。

男の子 ねえ、おじさん、歸りに寄つて一寸でい／＼から手品見せてね。

手品師 今煮ている豆をくれますか、私は豆が大好きなんです。

男の子 うん、その頃になれば煮えるから上げる。沢山上げるから歸りに寄つてね、
きつとね。

手品師 え、／＼、きつと寄りますよ。その代り豆をとつて置いて下さいよ。

男の子 うん、大丈夫、沢山とつて置くからね。

手品師 じゃ又あとでね。お仕置場はこの道をまつすぐに行けばいゝんでしよう？

男の子 えゝ。この道をまつすぐに行つて二ツ目の角を曲ればすぐそこよ。

手品師 ありがとう、坊ツちやん。じゃ後でね。

手品師、行つてしまふ。男の子それを窓から見送る。そしてなべの所へ歸つて来てそれをかきまわす。
上手の戸が細目に開いて王女が聲をかける。

王女 坊ツちやん。

男の子 (振り返る) あ、王女様。今のは手品師でしたよ、ぼく、始めのうちはお

役人が王女様をさがしに来たのかと思つてとつてもびつくりしちゃいました。

王女 そう。

男の子 あと三十分で十二時になります。あと三十分間、誰が来ても、その部屋には入れませんから、安心してかくれていて下さいね。

王女 ありがとう。私を助けてくれたら、沢山ごほうびを上げますからね。

男の子 いゝえ、ごほうびなんかどうだつていゝです。こんなにきれいで優しい王

女様ですもの、いくらでもかくして上げます。(戸の所へ行く) さ、きたないけれどその寢台にもぐつていて下さい。

男の子戸をしめて窓から外をうかがう。そしていすを戸の前に持つて来てすわる。それでも落着かずあたりを見まわし、ほうきを持つて来る。腕まくりをしてほうきを構えいすにすわる。

— 間 —

窓から近所の娘が顔を出す。

娘 ねエ、何してるの。

男の子 (知らぬ顔をしている)

娘 何すましているの。

男の子 (聞えないふりをする)

娘、戸口よりはいつて来る。

娘 何しているのさ。

男の子 何をしていたつていゝじやないか。

娘 ねエ、お仕置、見に行かない。

男の子 お仕置を？

娘 えへ。みんな見に行くわ。一緒に行かない？

男の子 いやだよ。ぼく御用をしているんだもの。

娘 いじやないの。

男の子 だめだよ、今ぼくは豆を煮ているんだもの、(なべの方に行く、そしてかきまわす)

ほら、もうじき煮えるだらう。豆がこげるといけないもの。

娘 ね、あんた。今こゝでほうきなんか持つて何してたの？(と上手の戸の前へ行く)

男の子 (あわてゝその方に行き)だめだよ、そんな所へ行つちや。

娘 どうして？

男 どうしてもだめなんだ。(戸の前に立ちふさがる)

男 おかしな人ね、何かあるの？

男の子 何にもないさ……只、お母さんが今病気で寝てるからだよ。

娘 あら、おばさん御病氣なの、ちつとも知らなかつたわ、ちや一寸御見舞じて行こうかしら。(行きかける)

男の子 いけないよ。お母さんはお見舞なんかしなくてもいゝ病氣なんだ。

娘 あら、そんな変な病氣なんてないわ。

男の子 ……今、……今、お母さんは熱が出て眠っているんだよ、だからだめなんだ。

娘 あゝ、眠つてらつしやるの。

男の子 ね、早く行かない遅くなつちやうよ。

娘 うゝん、まだ大丈夫よ。だつて首きり役人がまだ來ないんですつて。

男の子 首きり役人が？

娘 えゝ、だつて玉女様が今朝からお城に見えなくつちやつたんですつて。

男の子 (わざと驚いて)玉女様が。

娘 そう、どつかへお逃げになつたのよ。

男の子 逃げた？

娘 えゝ、きつとどつかにかくれていらつしやるのよ。

男の子 かくれてる？

娘 え、お城のお役人がみんな今朝から方々さがしまわつて居るの、それでも見つかからないんですつて。

男の子 へえ……

娘 だから大変なさわざよ。さつきもおふれが出てね、王女様をみつけた人には大変なごほうびを下さるんですつて。

男の子 ごほうび？

娘 そう。何でも金貨をおけに三ばいも下さるんですつて。ね、おけに三ばいの金貨つてどれ程あるかしら。

男の子 おけに三ばいの金貨？ 随分沢山だなア、それだけあつたらお母さんに何でも好きなものを買つて上げられるな。この間つからお母さんは新しいがいがいがほしいつておつしやつてたけど……

娘 ばかね、おけに三ばいも金貨があればがいがいとうどこぢやないわ、それこそ、一生なんにもしなくも暮して行けるわ。

男の子 一生なんにもしなくも暮して行ける？……(考え込んでしまう)

娘 何考えて居るの、王女様を見つけた人がもらうのよ、そのお金は。

男の子 ……王女様はやさしい、いゝ方だからさつと捕らないよ。

娘 そうかしら。でも私はさつと捕ると思うわ。

男の子 じゃ早くお仕置場へ行けばいゝじやないか。

娘 そうね。

男の子 手品師がさつき行つたよ、早く行かないと手品が見られないよ。

娘 あらそう？ それじや行つて見るわ、あんたも行かない？

男の子 うん。行きたいけれど、豆がこげつくといけけないもの。

娘 かわいさうね、……じや行くわ、さよなら、お母さんお大事に。

男の子 え？ (気がついて) あ、ありがとう。さよなら。

近所の娘行つてしまう。男の子見送つて行つてしまつたのをたしかめて、なべの所へ行き、かきまわす。

男の子 早く煮えないかな、この豆が煮える頃にはおひるになる。おひるになりさえすれば王女様は助かるんだ。そら豆、そら豆早く煮えろ。……でもよかつたな。もう少しでおけに三ばいの金貨をほしくなつちまう所だつた。だけどおけに三ば

いの金貨があつたらすてきたなア……でも、あんなに優しくてきれいな王女様をお助けする方がもつとすてきた。お母さんだつてこのことを話せばきつと『いいことをしたネ』つてはめて下さるさまつている。

この時窓の外を盲が通る。そして戸をノックする。

盲　ごめん下さい。

男の子　（氣が付いてキツとなる）

盲　ごめん下さい。

男の子　どなたです？

盲　旅の者でございませぬ、一寸おうかがいしたいのでございませぬが。

男の子　はい。

と戸を開ける。相手が盲なので安心する。

男の子　なあんだ、お盲さんか。

盲　はい。盲の旅人でございませぬ。一寸伺いますがお仕置場はどつちへ参りましたらよろしいのでございませぬか。

男の子　お仕置場はおじさんが今来た道をまっすぐ行つて二ツ目の角を曲ればすぐ

だけど……でも、おじさん、どうするの、お仕置場へなんか行つて……

盲　どうする？……あ、私が盲だからですか。やつぱりお仕置場を見に行くんです。

男の子　お仕置場を見るに？……

盲　え、見に行くんです。盲にだつてちやんと見えるんですよ。

男の子　へえ、不思議だな。じゃ、あそこに見えるお城の時計は何時だかわかる？

盲　それは見えませぬ。けれど今はもうおひる近くでしよう。

男の子　うん、よく当るなあ。

盲　当てるんじゃないやなくてわかるんです。

男の子　どうして？

盲　だつて、坊つちやんは今豆を煮ているでしよう、そしてこのにおいからするともう大分煮えていますね。だからもうお午近くだつてことがわかるでしよう。

男の子　成程。

盲　お仕置はおひるなんでしよう。ね、坊つちやん、もしよかつたら私をお仕置場

までつれて行つて下さいませんか。

男の子 うん、つれて行つて上げたいけれど、ぼく今手がはなせないんだもの、豆を煮ているし、それにおるす番もしなくちならないもの。

盲 そうですか。

男の子 それにね、お仕置はまだ仲々はじまらないかもしれないよ。

盲 おや、どうしてです？

男 それはね、王女様が……（と言いかけてあわてて）……王女様つてとても優しくきれいな方なんですつてさ。

盲 そうですか、私はどうせこの目でお仕置を見るわけではないんです、たゞうしろの方で人の氣配やさゞやさだけ聞けばそれでいゝんですから、そんなに急ぐわけではありません。少しこゝで体ませて頂いてもいゝでしようか。

男の子 いゝですよ、あつちの部屋の方にさえ行かなければ。

盲 えゝ、こゝで充分です。

盲、いすに腰を下す。男の子、彼を不思議そうにながめてまわる。

盲 坊つちちゃん、何を私の廻りを廻つているんですか。

男の子 どうしてわかるの。おかしいな。

盲 ちつともおかしくはありませんよ。

男の子 でも、おじさん、なんにも見えないんでしよう。

盲 えゝ、見えませんよ。

男の ども、何にも見えないなんてどんな氣持だろうな。

盲 坊つちちゃん、目をつぶつてごらんなさい。それが盲の氣持です。

男の子 （目をつぶつて見る）何にも見えないや、第一これじゃこわくて一ト足も歩けやしない、おじさんよく歩けるなア。

盲 なれゝばこわくはありません。盲の目では見られませんが、鼻とか耳とかでものが見られますからね。

男の子 鼻や耳でものが見えるの？ どうして？ 不思議だなア。（歩きまわる）

盲 坊つちちゃん、あなたは今歩き廻つているでしよう？

男の子 うん。

盲 　ほら、ちやんと見えるじやありませんか。

男の子 　そりや足音がするからじやないの。

盲 　だから耳で見たんです。

男の子 　あ、そうか、じや、こうしたらどうする？（と、足音をしのばせて机のむこうにまわりいすの上に立つ）さ、どうした。

盲 　は、あ、そおつとむこうへ行つて何かの上に乗りましたね。

男の子 　どうしてわかるんだらうな。おじさんは生れた時から目が見えなかつたの。

盲 　いゝえ、子供の頃、そう丁度、あなた位の年までは目が見えました。

男の子 　どうして見えなくなつたの。

盲 　丁度その頃目を病いましてね、それでだん／＼だん／＼見えなくなつてしまつたんです。

男の子 　その時、悲しかつたでしょう。

盲 　えゝ、確かにだん／＼見えなくなつて来たときは寂しかつたですよ。一そのこと死んでしまおうかと思つた程でした。でもね、目がだん／＼見えなくなると一

緒に耳や鼻でものが見える様になつて来たんです。

男の子 　ふうん、不思議だな。

盲 　えゝ、人間の体つて言うものは神様が具合よく作つて下さつたものです。ですから、目が全部見えなくなつた時には、目で見なくともちつとも困らなくなりましてよ。その上、目が見えていた頃より世の中がもつと／＼よく見える様になりましたものね。

男の子 　へえ、目で見るよりもよく見えるんですつて？

盲 　えゝ、目が見えていた頃は人の上べだけしか見えませんでした。この頃はちやんと心の中まで見えます。

男の子 　えッ、心の中まで？

盲 　そう。その人がいゝ人か悪い人か、優しい人か、そうでない人か、すぐにわかります。公園のベンチで日向ぼつこをしていても、前を通る人がどんな人か足音を聞いただけでわかります。

男の子 　そんなことまで分る？

盲 え、坊つちやんだつて、そのつもりになればわかる筈ですよ。あなたは今な
べで豆が煮えている音が聞えますか。

男の子 うん、聞えない。

盲 そうでせう。私にはよく聞えます。聞こうと思つて一生懸命に耳をすましてご
らんない。

男の子 (耳をすます) ……あ、聞える。随分大きな音がしている。どうしてふつ
うにしていると聞えないんだらう。

盲 注意がたらないからです。私達は見えませんが、いつでも耳をすましていま
す。ですから、前を通る人がどんな人か足音でわかるんです。

男の子 そうかもしれないな、ぼくにも出来るかしら。

盲 一生懸命になれば出来ましても。じゃ、坊つちやん、目をつぶつてごらんない、
い、い、ですか、私が前を通りますからね。

盲、男の子の前をついでさぐる。

男の子 何しているの。

盲 こうして置かないと、つまづいてころびますからね。さ、い、ですか。

男の子 い、よ。(と、目をつぶつて耳をすます)

盲、疲れ切つたように足をひきづつて歩く。

盲 どうです？ 坊つちやん。

男の子 うん、わかつたよ、とつても何だかくたびれた足音だつたよ。

盲 そうでしょう？ じゃ今度は？

盲、今度は胸をはつてゆつたりと歩く。

盲 どうです？

男の子 うん、今度はとつても偉い人の足音みたいだつた。

盲 どうです。足音だつて一生懸命に聞いていればよくわかるものでしょう。

男の子 本当だ、ぼく今までこんなことちつとも知らなかつた。でも、音のしない
ものばどうするの？

盲 音がしなければ鼻でにおいをかぎます。においもしなければ手でも足でも体中
で見るんです。

男の子 体中で？

盲 え、そうです。お天氣のいゝ日にお日様がキラ／＼と輝くでしょう。私も子供頃、目で見て覚えていきます。今では目では見ませんが、日向にいと体中にお日様の光がポカ／＼と当るのがよくわかります。雨が降つて来ると私は手が見るんです。

男の子 手で？

盲 あなただつて目が見えるくせに『おや、雨かな？』つて言つて手で雨を見るじやありませんか。

男の子 あ、そうか。確かに手でも見えるわけだな。

盲 そればかりじやありません。軒下で雨宿りをしている時に手をこう出してポタリ、ポタリ、ポタリ、ポタリと降つて来る雨を手で見えていますとね、……目の前にすーつと広がつた野原に雨が一面に煙つて、むこうの山がぼんやりと見えている景色が浮んだり、にぎやかな街に雨が降つている風景なんかが、夢の様に浮んで来るんです。ですから盲はいつどんな所ででも自分の好きな所に居ることが出来るんです。

るんです。

男の子 どうしてきれいな景色しか浮んで来ないの？ こわくていやなことは見え

ないの？

盲 え、私はいつでも人を困らせたり、いやがらしたりするようなことを決してしないようにしています。だから、きれいなものしか見ないのです。

男の子 ふーん、そうかな。人間つて、いゝことをしていればきれいなものが見られるんですね、あゝよかつた。ぼくさつきもうすこしでよくないことをしてしまつたかもしれなかつたんだ。

盲 ほう……

男の子 僕のお母さんはね、いつも新しいがいとうがほしいわておつしやつてるんだけど、ぼくが買つて上げようと思ひさえすれば買つて上げられたんです。だつて、おけに三ばいも金貨がもらえるかもしれなかつたんですもの。

盲 おけに三ばいの金貨ですつて？

男の子 うん。ぼくがある約束を破りさえすれば、もらえたんです。今だつて間に

合うかもしれない。

盲 じゃ、約束を破つてもいゝとだけかゞいつたら、今でも破りますか。

男の子 うゝん、いやだ。ぼくだつて男だもの、一ぺん約束したら、おけに三ばい位金貨をくれたつて約束は破らないよ。

盲 そう、偉い。金貨をおけに五はもらつたつて十ばいもらつたつていけませんよ。坊ちゃん、あなたはその約束を守つてうれしいでしょう。

男の子 うん、本当に破らなくてよかつたと思うよ。

盲 じゃ、今日をつぶつてごらんさい。

男の子 (目をつぶる) ……………

盲 何が見えます。

男の子 ……あ、見える見える。お母さんの顔だ、にこ／＼笑つてらつしやる。…

…あら、その後にはきれいな野原が見える。花が一ぱい咲いてきてきたな、きれいなかはいゝお城も見える……

盲 ね。きれいでしよう？

男の子 (目を開き) うん、とてもきれいだった。

盲 それはね、あなたがよいことをしてうれしかつたでしょう。そして坊つちやんが美しい心を持つていたからこそきれいな景色が見えたんです。でも、もし坊つちやんが約束を破つたり、かわいさうな動物をいじめたり、悪いことをしてごらんない。いくら目をつぶつてもきれいなものは二度と見られませんよ。金貨とどつちがいゝと思います。

男の子 ぼく金貨よりきれいな景色の方がいゝや。だつて新しいがいとうを買つて上げるよりも、もつとうれしそうなお母さんの顔が見えたもの。

盲 そうです。その通り……おや、ぼら、ほらぼんやりしていると豆がこげつきますよ。何だか少し臭いようです。

男の子 (あわてゝなべの所へ行きかきまわす) ああ、よかつた。本当にもう少しでこげつく所だつた。小父さん、又鼻で見たのね。

盲 そう、鼻で見たんです。お豆がもう煮えるとするとおひるですね、お仕置場へ行かなくちや。

男の子　じゃ、帰りに又寄つて下さいね。ぼく、もつと小父さんのお話をききたい
んですもの。その頃には豆が煮えていますから、少し上げますからね。

盲　ごちそうさま。じゃ又、あとで寄らせてもらいますよ。

男の子　帰りに僕の家わかる。

盲　わかりますとも、豆の匂いをたどつて来ればすぐわかります。

男の子　あ、そうか。

盲　じゃ、あとで。(と、歩きかける)

男の子　あ、そつちじゃないよ、おじさん、ドアはこつちですよ。(と、手をとつてやる)

盲　ありがとう。あんまりグル／＼まわつたんで、ついまちがえちまつてね。

男の子　今度は鼻や耳ぢや見えなかつたのね。

盲　はッはッはッはッ……これは参つた。じゃあとで。

男の子　あとでね、きつとね。

盲、行つてしまふ。男の子なべの所へ行つて火を弱くする。そしていすにまたがる。

男の子　あゝ、いゝこと覚えちやつた、目をつぶるとこんな色んなものが見える

なんて今まで知らなかつた。これなら、今度から雨が降つて外へ遊びに行かれない
くたつてちつとも困りやしない。(目をつぶる)……あゝ、いゝなア、原つばにきれ
いな花が咲いてら、川も流れてる、お日様はキラ／＼明る照つているし、鳥が鳴
いてら、……

窓の外から歌うたいがギターをひきながらのぞく。

男の子　……あら、きれいな音楽が聞えらア。

歌うたい　(戸口を開けて)ごめん。

男の子　………

歌うたい　坊ちゃん。

男の子　(びつくりして)、なあんだ、どうもきれいな音楽が聞えると思つたらおじさ

んがひいてたのか。

歌うたい　一寸伺ひますがね、お仕置場へはどういう風に行けばいいの。

男の子　あれ、今日はお仕置場へ行く道を聞きに来る人ばかりだな、お仕置場は

ね、この道をまっすぐに行つて二ツ目の角を曲ればすぐわかります。

歌うたい ありがとう。(なべに氣付き)おやおや、さつきからどうもい〜においがしていると思つたら、坊つちやん、豆を煮ているんですね。

男の子 うん、そうだよ。

歌うたい 少し下さいますか、私は豆が大好きなんです、それに今お腹がペコペコなんです。

男の子 でもまだ煮えてないからだめ。

歌うたい 生煮えでも結構です。これからお仕置場へ行つて皆の前で歌をうたわなくちやならないのに、こんなにお腹が空いてはとても歌がうたえません。

男の子 あゝ、おじさんは歌うたいなのね。

歌うたい えゝ、旅から旅へ渡つて歩く歌りたいです。

男の子 じゃ、何か歌をうたつてきかせてくれない。そうしたら豆を上げるから。

歌うたい じゃ歌いますよ。

——一節歌う(歌は子供向の分りやすいもので滑稽味あるもの)——さ、豆を下さい。

男の子 ずるいや、もつと歌わなくちや、全部歌わなくちや。

歌うたい そのかわり豆をどつさり下さいよ——(續きを歌う)——さ、豆を下さい。

男の子 さ、上げよう。(なべから豆を大きなスプーンですくつてやる)

歌うたい ありがとう。(貰つた豆をフ〜吹きながら食べる)あゝ、うまい。(全部食べて

しまう)

男の子 ね、おじさん、もう一ツ歌つてくれたらもつと上げるけれどなア。

歌うたい よろしい、じゃ、歌いませう。

——(もう一曲歌う)——さ、豆を下さい。

男の子 ほら、上げますよ。(豆をすくつてやる)ね、おじさん、もう一ツ。

歌うたい もうだめですよ、あまり歌うとくたびれてしまうし、それにもう行かな

いと遅くなつちまいます。

男の子 つまんないな。

歌うたい 又、いつか來ますからね。

男の子 歸りに來ない? その頃になればもつと豆がよく煮えているから。

歌うたい (窓からのぞいて)あ、もう時間になる。急がなくちや、じゃ、坊ちやん、

さよなら、ごちそうさま。

男の子 おじさん、又来てね、きつとね。

歌うたい去る。男の子窓から時計を見て、

男の子 あ、もう少しだ。(上手の戸口の所へ行き) 王女様、王女様、もう少しですよ、

もうじき十二時になりますよ。(鍋の所へ来てかきまわす。かきまわしながら鼻歌の様にさつき

歌うたいの歌った歌のメロディーで歌ふ)

早く煮えろよ、そら豆さん

お前が煮えればもうおひる

おひるになれば十二時の

お城の時計がなりますよ。

そうすりや やさしい王女様

首をきられず 助かるよ

早く煮えろよ そら豆さん。

この時、窓の外を首きり役人が通る。

歌聲をきよつけてドアを開けてはいつて来る。大きなまさかりを持つているが全體的にユーモラスな感じが出ていなくてはいけない。

首きり役人 こら、小ぞう。

男の子 (びつくりしてふりむく) あッ。

首きり役人 お前、今、何をしていた。

男の子 ぼくですか、何もしていません。ただ、豆を煮てました。

首きり役人 豆を煮ているのはわかっている、お前は今豆を煮ながら何かうたつて

いたろう。

男の子 いゝえ、……その……たゞ唱歌を歌つてました。

首きり役人 唱歌だ？ うそをつけ。確か王女様がどうのこうのと歌つていたろう。

男の子 いゝえ。

首きり役人 いゝや、確かにおれにはそう聞えた。小ぞう、お前は王女様の居る所

をしつていたろう。

男の子 知りません……僕、王女様なんてしりません。

首きり役人 いゝや、知つてゐる。知つてゐるにちがいない。どこだ、教えて。

男の子 だつて、ぼくのしつてゐるわけがないじゃありませんか。

首きり役人 お前も知つてゐるだろうが、王女様は今日お仕置になるのだが、今朝からお城に見えなくなつたんだ。それで、王女様をさがしたものは大変なごほうびが出るんだ。さ、早く教えて。

男の子 教えてつたつて……

首きり役人 よし、それじゃおれがさがす。

役人、あたりを見まわし、上手のドアに目をつける。

首きり役人 こら小ぞう、あの戸は何だ。

男の子 驚いて上手の戸の前に立ちふさがる。

男の子 こゝはお母さんの部屋です。

首斬り役人 何？ おふくろの部屋だ？ よし俺が確かめてやる。

男の子 いけません、この中には王女様なんか居やしません。

首きり役人 いや、一おうたしかめる。

男の子 お母さんがびつくりします。お母さんは今病気で寝てゐるんです、だから

あなたの様なこわい人を見ると病気が重くなるから、はいつちいけません。

首きり役人 何だ？ おふくろは病氣だ、ほんとうか？

男の子 本当ですとも、だからぼくが代りに豆を煮てゐるんじやありませんか。

首きり役人 そうか、よし。じやお前のおふくろを驚かしてはいかんから部屋へは

はいらんが、こゝで少し休ましてもらうぞ。(すわりこんでしまう)

男の子 (ホッとして) あなたは一体だれです。

首きり役人 俺が？ 誰に見える？

男の子 さあ……

首きり役人 (まさかりをたゝいて) これが見えないか？ このまさかりが。

男の子 あゝ、それじゃ……あなたはことによると首きり？

首きり役人 そうだ、おれは首斬り役人だ。この四十年間に千人もの首を斬つて來

た首斬り役人はこのおれだ、どうだ、こわいか。

男の子 こわくはありません。ぼくは何にも悪いことをしませんもの。

首きり役人　どうだ、このまさかりは、これは俺の秘藏のまさかりだ、よく光つて
いるだらう。

男の子　よくきれるでしようね。

首斬り役人　あゝ、きれるとも。それに今日は王女様のお首をきるのだから、今朝
から念入りにといで置いたから、髪の毛だつて眞二ツに切れるぞ、ためしにお前
の首をきつてやろうか。

男の子　いゝえ、結構です。

首きり役人　お前はお仕置を見に行かないのか？　面白いぞ。

男の子　行かれないんです、僕、お母さんが病気で寝ているんですもの。

首斬り役人　あゝそうか、でも見たいだらう。それじゃ、王様のラツバがラツバを

吹いて俺を呼ぶまでこゝでお仕置のしかたを教えてやろう。

男の子　でも……あなた、早くお仕置場へ行かなくてもいゝんですか。

首きり役人　最初のラツバがなるまでは大丈夫だ。いゝか今こゝでその通りにやつ
て見せてやるから見ていろ。

男の子　えゝ、でも、そのまさかりをあんまりふり廻さないで下さい。手がすべ
ると危いから。

首きり役人　ばかを言え。おれはまさかり使いの名人だ、手がすべるなんてことは
ありわせん。いゝか、いよくお仕置の始まるラツバが鳴ると、おれは王女様の
お手をとつてお仕置場へ出る、すると見物人がワーツと喜んで手をたたく。こら
手をたたけ。

男の子　(仕方なく手をたたく)

首きり役人　それからおれは王女様をお仕置台にすわらせる、こらお前王女様の代
りになれ。

男の子　こゝで見てた方がいゝんです。

首きり役人　いゝからなれ。そしてこのいすにすわれ。そこでおれは王女様に『御
覚悟はよろしうございますか』とおきくする、王女様はうなずかれる。そこでお
れは王女様に目かくしをする。

男の子　いやです。目かくしをしちや。

首きり役人　その通りにするんだ。

男の子　でも、目かくしをしちや何も見えなくなつちまいます。

首きり役人　それもそうだな。で、いよいよ、俺はこうしてまさかりをふり上げる。

男の子　(いすから逃げ出し)もうたくさんです。それから先はもうわかりました。(窓

から時計を見る)あ、もう十二時だ。

首きり役人　何、十二時だ。

男の子　十二時を打つてしまえば王女様は助かるんですね。

首きり役人　何?　こら小ぞう、そんなことをお前はどうして知つているんだ。

男の子　(困つて)……それは……ある人が教えてくれたんです。

きり役人　それを知つているのはお城の人だけだ……お前は王女様をかくして

男の子　いゝえ。

この時、お城の一番大きな時計が十二時を打ち出す。

男の子　あッ、十二時だ。(上手のドアの所へ行つて)王女様、王女様、とうとう十二時に

なりました。

首きり役人　何?　王女様?(上手のドアへ飛びこむ。そして王女の手をつかんで引出す男の子邪

魔をする)王女様だ。王女様だ。おーい、王女様を見つけたぞ、時計を止める、時

計を止める。

この所、三人の立まわりを面白くする。やがて、中位の時計が打ち始める。

男の子　あ、又なり出した、一ツ二ツ三ツ。

王女、首きり役人の手をふりはなして居ずまいを直す、おのづと立派になる。

王女　これ、首きり役人、もうだめだ。おあきらめなさい、あと小さな時計がなれ

ばおしまいです。

首きり役人、平伏する。

最後の小さな時計がなりはじめる。

男の子　あゝ、とうとう小さいのもなりはじめた。二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ

八ツ九ツ十十一、十二、ばんざい。とうとうなつた。王女様おめでとうございま

す、よかつたですね。

王女　ありがとう、本当にありがとう、坊つちやん。これ首きり役人、私は法律によつて首をきられるところだつたが、十二時は打つてしまつたから今度は法律によつて助つた。もう首をきられなくてもいい。私は今迄通り王女です。お前もそれは知つておいでだらう。

首きり役人　はあ、王女様。存じて居ります。どうか先程の失礼はおゆるし下さい。

王女　いけません。今度はお前の番です。四ツの時計が一ぺんにならなかつたのはお前のせいです。お前はあの四ツの時計の番人でせう。

首きり役人　はい。ですが今朝はこのまさかりをとぐのにむちゆうになつて、ついねじを巻くのを忘れたのでございます。どうかおゆるし下さいませ。

女王　いや、いけない、お前は首をきられなくてはなりません。

首きり役人　でも、私は人の首は今迄随分きりましたが、自分の首をきるのはどうすればいいのか存じて居りません。

男の子　自分で自分の首をきるのはむづかしいでしょうね。王女様、ゆるしてお上げなさい。ぼくは首をきるなんて大きらいです。このおじさんばかりでなくだれ

だつて首をきられるはいやでしょうし、第一そんなことは野蠻です。

王女　そうね、坊つちやんはえらいわね。私の命を助けて下さつたこの坊つちやんがそう言うからゆるして上げましょう。

首きり役人　ありがとうございます。坊や、ありがとう。

王女　坊ちやんの言う通り私は今度から首きりなんて言う野蠻なお仕置はなくしてしまふ法律を作りましょう。そうしたらお前はそのままかりを博物館に納めてしまつて、時計の番人だけにおなり。

首きり役人　はあ。

王女　さ、坊つちやん、お城へ行きますよう。私を助けて下さつたお礼におけに十ぱい金貨を上げましょう。

男の子　いゝえ、そんなお礼なんていりません。それよりお母さんに新しいがいとさえ下さればぼくとでもうれいのですけど。

王女　えゝゝ、上げますとも。それから坊ちやんとお母さんは今日からお城の中でお暮しなさい。

男の子 え？ お城の中で？ すてきだな。お母さんがどんなに喜ぶだろう、……でも王女様、お城へ行つてしまえばもう、さつき来た手品師にも盲のおじさんにも歌うたいのおじさんにもあえなくなつちまいますね。盲のおじさんはぼくにあらぬことを教えてくれたんですものあえなくなつちまうのは淋しいな。

王女 え、私もあつちの部屋で皆聞いていました。皆いゝ人でしたね、ことに盲の老人の話には私も感心しました。……じや、あの手品師と盲と歌うたひもあとで役人をやつてお城につれて來させましょう。そして一生お城の中に暮してもらつて、手品を見せたり、お話を聞かせたり、歌を歌つてもらいましょう。ね、それならいいでしょう。

男の子 え、それならとつてもすてきです、よかつたなア。(あたりをとびまわる)

王女 さ、首きり役人、いや時計番や、私と坊ちゃんはお城へ帰ります。先づれをしない。

首きり役人 はあ、承知致しました。

首きり役人、戸を開ける。

首斬り役人 下にいろ、下にいろ、王女様のお通りだ。

王女 それからこの坊つちちゃんもね。

首斬り役人 はあ、下にいろ。それから王女様をお助けした坊つちちゃんのお通りだ。

首きり役人を先頭に王女、男の子の順でしづく退場する。男の子は首きり役人のまねをしてまさかりの代りにほおきを持つて、王女を後から守るかの様にえぼつて歩く。

皆、出て行つてしまふ。

やがて、男の子あわてゝかけもどつて來る。なべを開けて見て、

男の子 あ、やつぱりこげてらあ、困つたな。お母さんにしかられちまう。……でもまあいゝや、こうして置こう。

と鍋を下して、又急いでかけて行きかける。戸口の所で氣付き舞臺正面にもどつて來る、そして観客に呼びかける。

男の子 皆さん、今迄ごらんになつていた様なわけではくはお城へ行くことになりました。そのかはり豆がこんなにかけてしまいました。お母さんが帰つて來ておこるといけませんから、もし帰つて來ましたら皆さんからよく言いわけをして置

いて下さいね、お願いします。それから、お城へ行つたらすぐにお母さんを迎い
によこしますからつて、それも宜しく、お願いします。ぢや、急ぎますから、こ
れで、さよなら。

男の子、ピョッコリおじぎをしてバタ／＼と馳け去る。

—幕—

あ と が き

(ある小学校の先生の質問にこたえたつぎの
一文をもつてあとがきにかえる)

一トくちに「こどものしはい」あるいは「こどものためのしはい」といつても、「
こどもにみせるしはい」と、「こどもがあつまつて自分たちでやるしはい」との二つ
があります。

あなたの御質問はどちらについてでしょうか？

「こどもにみせるしはい」すなわち「こどもがあつまつて自分たちでやるしはい」
あるいは、

「こどもがあつまつて自分たちでやるしはい」すなわち「こどもにみせるしはい」
と、そういうふうにおもつておいでのようにもあなたの質問はとれますが。

もし、そうおもつておいでなら、とんだまちがいで、この二つは、はつきりわかれ

ているのです。この二つは決して混同してはいけません。

ですから、便宜上、むかしから、「こどもにみせるしはい」を童話劇、「こどもがあつまつて自分たちでやるしはい」を児童劇とわけていつています。

「童話劇」と「児童劇」……このくべつをまずあなたにのみこんでいただきたいのです。そうすれば、あなたの質問のなかの一つの、「あなたのお書きになつてゐるこどものしはいの脚本のことばは、こどもにはむずかしすぎます。こどもには消化しきれません。やむをえず、失礼とおもいますが、こどもにいえるような、やさしい、単純なことばになおして使用しております。これについても御意見がうかゞえたらとおもいます」というあなたの不満も自然消えることとおもひます。なぜなら、わたくしは、あなたのおつしやるような、あゝしたこどものしはいの脚本を書いたとき「童話劇」としては書きましたが、「児童劇」としては書きませんでしたから……これをこどもにみせたいと思つては書きましたが、これをこどもにやらせたいと思つては決して書きませんでしたから……

□

わたくしがどうして「こどものしはい」を書いたかというわけは、嘗て、伊藤熹朔さんと共著でだした「一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと」という童話劇集の「あとがき」にくわしく書いたように、自分からやつてみようと思つてはじめたことではなく、雑誌「赤い鳥」をやつていた鈴木三重吉さんにすすめられ、君、一つ、だれもやらないからやつてみないか、といわれてやつてみる氣になつたのです。そして、急にそれから俄勉強をはじめ、外國の童話劇集を手あたりしだいにあつめて讀み、まずそのストーリーの紹介からはじめ、しだいにそれえ自分の知恵を織込んでゆきました。いまから三十年ほどまえの話で、いま残念におもうことは、そのときあつめたそれらの本を大正十二年の震災でみんな焼いてしまつたことです。

ひつきようその前後五六年のあいだに書いたそれらのものがいまだに残つてゐるだけで、わたくしにすると、

「いまさらあんなものが役に立つとは……」

という気がするのです。はつきりいえば、そのあとの三十年間にわたくしの試みた
「しごとのあとをうけついでくれる人のさらになかつたことをわたくしは寂しいと思
うのです。……といつて、わたくしに、もう一度むかしに返つて、むかしのしごとを
つゞけろといわれても、……げんにときん／＼そういわれるからいのですが、いまは
もう鈴木三重吉もいなければ「赤い鳥」もない上に、もと／＼わたくしはそういう
だけの育ちでないのですから……

ですから、わたくしは、あなたのように、わたくしの書いたものをやりいゝように
する人があつても、ちゃんとした主意の立つてるかぎり、何んとも思いません。材料
としてゞも役に立てば、役に立つというそれだけで結構だとおもうからです。

ところで、このごろの小學校の教科書には、どの巻にも脚本よろのものが載つてい
ます。これをへんさんした人は、あれらを、教材として、あなたがたにどうあつかわ
せようとして組入れたのでしょうか？……何か、あれには、とくべつの指定でもある

のですか？……

いまの子どもたちは、日常、どんな遊びをしているか知りませんが、われ／＼のこ
どもの時分のことをいえば、「いくさごっこ」です、「どろぼうごっこ」です、「汽
車ごっこ」です。女の子になると「おばさんごっこ」です。……それらの遊びの精神
はすべて「しばい」に外ならないのです。われ／＼は知らず知らずに「しばい」をや
つていたのです。……「しばい」は、じつに子どもたちの本能に外ならないのです。

それだけに、わたくしは、あなたがたに「子どものがあつまつて自分たちであるし
ばい」を子どもたちの「娯樂」としてばかりあつかつていたゞきたくないのです。つ
ねに、その上に、「教育」の目をひからせつゞけていたゞきたいのです。どこまでも
小學校の課程の一つとして、ほかの學科とも適當に連絡をとり、慎重に考慮してい
たゞきたいのです。

それには「發表」することよりも「こしらえ上げる」ことに重點を置くべきだと
おもいます。「人にみせる」ということを目的としないで、「あつまつてみんなでそ

れに關するしごとをし合う”といふことをまづ目的にすべきだとおもいます。それによつて、子どもたちに、共同でするしごとの上でのいゝ習慣を興えることもできます。“しばい”のしごとといふものはだらめではできませんから。それにたすかわる一人々々のその任務にはつきりした責任を要求しますから……

それにしても “自分はしばい”といふものを田舎で一二度みたことがあるきりです。“とあなたは正直におつしやる。おそらくしかし、あなたばかりでなく、これは全國の小學校の先生たちの半分以上がそうではないのでしょうか？ そして、あなたのように、いわずかたらずにこまつてゐるのではないのでしょうか？ わたくしたちとしても、これは、何んとか心配しなければならぬ問題だとおもいます。それと同時に、子どもの幸福のために、“子どもにみせるしばい”すなわち“童話劇”の振興をはからなければいけないとおもつています。

昭和二十三年八月

久保田万太郎

三つの劇の舞臺装置に就いて

伊藤 熹 朔

舞臺装置は繪畫的な構圖を考えるだけではいけません。實際に舞臺の上に組立てられてそこで芝居が出来る様に考えなければいけません。芝居の出来ない舞臺装置は、なんの役にも立ちません。

そこで役に立つ舞臺装置を考える爲めには、脚本をなんべんも讀んで、その内容をよくのみこみ、俳優の出入場所がどんな位置にあるとか、どこでどんな芝居があるかをすつかり頭に入れて、それからその脚本の示す場所や氣分が出る様に、繪畫的に又立體的に工風するのです。

又、芝居を演じる場所の大きさや廣さで、装置のやり方がぜんぜん變つて來ますの

でどんな場所で芝居を演じるかを頭に置いて、舞臺装置を考える時に、その舞臺の大きさや高さを、念頭に置き、その平面圖の上に設計しなければなりません。

この本に出ている舞臺装置圖は、大きな舞臺で、費用もあるとして理想的に考えたものです。諸君が學校などで演じる場合は、なかなかこんな風には出来ないと思います。然しこれを手本として、もつと單純化することも出来ます。この單純化がただ簡單に品物をはぶくということにならないで、少しのもので澤山のものを暗示させる様に考えて下さい。

次に一つ一つの舞臺装置についてお話させよう。

「一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと」は、第一場と第三場は空想的な場面ですから寫實的には出来ません、それ故に圖案的に考えたらいいと思います。この場面で最も必要なものは、時計、剃がしごよみ、出入口、窓です。それ故に以上のものが舞臺装置を考える時の中心點となるのです。時計の針は動かなければならぬので後から人が動かす様に工風します。剃がしごよみは十二月三十一日と一月一日の二

枚つくり重ねて置きます。

この舞臺装置を最も單純化すれば時計と剃がしごよみだけでもいいと思います。

小道具としては、大きなていぶる、椅子、長いのと短いのと二本のローソク、電話などがいろいろあります。

第二場は、クリスマスの日のあたゝかい家庭の気分が出ればいいのです、二つの窓と入口が必要です。二つの窓が雪になつたり雨になつたりいろいろ變化する工風がむずかしいのですが、これは「せりふ」だけであらわすことも出来ると思います。クリスマス・ツリーは気分や季節を出す上にぜひ飾つて下さい。

「雨の降る日は悪いお天気」は、雨の降つた日のたいくつな子供部屋の感じが出ればいいのです。必要なものは、正面に窓、人のはいれる位に大きなおもちゃ棚です。その外小道具としては大きなていぶる、四つの椅子、おもちゃ澤山、乳母車等があります。

この芝居では一郎と春子は人形ですから、二人を人形らしくさせなければなりません。

それから後に太郎も花子も人形になるので途中から人形らしくさせなければなりません。それには半分だけのお面をかぶせることにします。太郎と花子は途中から観客に見えない様に手早くお面をかぶり、後に人間にもどつた時に手早くお面を取ることになります。

この舞臺装置もおもちや棚だけでも出来ると思います。

「こうして豆は煮えました」この舞臺面はあまり金持でない家庭の臺所です。窓、入口、いろり 爐が必要で、窓は澤山の人達がかかるがわるのぞいて色々話をしますので客席のどこからも見える位置に置くべきです。爐の位置も演技に大きな関係がありますから考えてきめて下さい。

この芝居は現代よりも少し古い時代にした方が話のすじから云つてもよいと思いま

す。その方が衣裳も面白くなります。豆を煮る爐の中には赤い電氣を仕込んで火が燃えてる様に見せかけるのもいゝと思います。豆を煮るなべは少し大きなのをえらんで下さい。

諸君の工風でいろいろ面白いことが出来ると思います。自分達自身でやつて見ることが一番いゝことです。

昭和二十三年八月

納本



一に十二をかけるのと
十二に一をかけるのと

定價 百三十五圓

昭和二十三年十月二十五日印刷
昭和二十三年十一月一日發行

著者 久保田万太郎

發行者 富本一枝
東京都世田谷區祖師谷三ノ八三

印刷者 小川義一

印刷所 協和印刷株式會社
東京都新宿區荒木町四

發行所 山の木書店
東京都世田谷區祖師谷二ノ八二九

電話碯四六三番

(古藪製本)

山の書店近刊書目

人間の尊さを守ろう	柿のあゝる家	蟻と狐	魔術	パンタグリユエルの占 <small>うらない</small>
吉野源三郎著	壺井榮著	鹽谷贊著	芥川龍之介著	渡邊一夫 文字幸子 共著
出 十一 來 月	出 十二 來 月	出 十二 來 月	出 十二 來 月	出 十二 來 月



児92-K-2



1200600488059

